

ISSN 1882-0190

甲南女子大学

英 文 学 研 究

STUDIES IN ENGLISH LITERATURE

Konan Women's University

第 四 十 五 号

Volume 45

(2 0 0 9 年)

甲南女子大学英文学会
Konan Women's University English Literature Society

平成21年3月31日 発行
Issued March 31st, 2009

目 次
Contents

『メアリ・バートン』考——労使問題と理想の家庭像

.....越川 菜穂子1

Labor-Management Problems and Ideal Families in *Mary Barton*

..... KOSHIKAWA Naoko

★ ★ ★

『クリスマス・ストーリーズ』（その2）

.....藤本 隆康訳12

Charles Dickens, *Christmas Stories* – Part II

..... Tr. By FUJIMOTO Takayasu

『メアリ・バートン』考——労使問題と理想の家庭像

Labor-Management Problems and Ideal Families in *Mary Barton*

越川 菜穂子

Naoko KOSHIKAWA

(一) 労働者と資本家、それぞれの家庭の特徴

エリザベス・ギaskell(Elizabeth Gaskell)の処女作『メアリ・バートン』(*Mary Barton*)には、登場する家庭とその構成員に関して、ギaskellのその後の小説や短編小説にみられる特色がたいてい出そろっている。具体的に列挙すれば、夫婦のいずれかが死亡している片親の家庭、結末における貧しい信仰者の勝利、無信仰な資本家とその家族、美貌を頼みに玉の輿に乗ろうとする娘、美しくはないがやさしい娘、障害者やお針子、孤児になる娘、美貌ゆえに墮落する娘、貧しいが信仰心が篤く周囲の人々を導く男性、妻との死別によって挫折する夫、うぬぼれの強い金持ちの美青年、そして相次ぐ死などである。このような点で『メアリ・バートン』は、その後の作品の傾向を予測させる興味深い小説であり、他の作品を読む際に、上記の諸項目に関するギaskellの採り上げ方を知るためのインデックスの役割を果たしてくれる作品であると言える。本稿では、この作品に登場する資本家の家族と労働者の家族の描写に表れた、労使問題についての作者の見解と、作者が理想とする家族のあり方を探ってみたい。

この作品には、主人公メアリ(Mary)のバートン(Barton)家、ウィルソン(Wilson)家、リー(Legh)家など貧しい労働者の家族と、資本家であるカーソン(Carson)家の様子が描かれている。このうち、労働者の家庭はいくつかの共通点をもって描かれている。その一つは、夫婦に信仰心があり、ことに信仰心の篤い妻が生活面でも精神面でも家族の支えになっているという点である。たとえばジョン・バートン(John Barton)は、妻の生前には福音書の教えに従って生活していたが、妻が亡くなると人が変わったように頑固になり、他人と心を交わすことが少なくなる。組合の活動と聖書の教えを両立させようとしてその矛盾に苦しみ、その結果「墮落」(dropped down 439)してしまう。作者は妻を亡くした時のジョン・バートンの様子を次のように書いている。

One of the good influences over John Barton's life had departed that night. One of the ties which bound him down to the gentle humanities of earth was loosened, and henceforward the neighbours all remarked he was a changed man. His gloom and his sternness became habitual instead of occasional. He was more obstinate. (22)

もしもこの妻が死亡せずジョンに適切な忠告を与えたならば、あるいは少なくともそばにいて彼を支え続けたならば、彼は罪を犯すようなことにはならなかったと思われる。

第二の共通点は、夫か妻のいずれかが死亡して欠けているという点である。ウィルスン家のように夫に先立たれたら家族は経済的にいっそう困窮するし、バートン家のように妻が亡くなってしまうと、子どもの人格形成上マイナスになることがある。夫婦のいずれが先立っても遺された家族には生活面での不便が生じるが、それによって互いに寄り添い、協力し合えるようになることもある。

第三の共通点は、作中の労働者の家族は協力し合って生活しているが、夫は賃金を稼ぐための仕事とは無関係な関心事をもち、そのためにしばしば家計上で不安要因となっている点である。たとえばジョンは組合運動に関心をもち、ジョウブ・リー(Job Legh)は博物学に熱心なため植物や昆虫の採集に興じ、家計をかえりみず高価な標本を買うため、マーガレットの収入が不可欠となっている。

しかし共通点のなかでも最も注目すべきなのは、連帯感が強いことである。売笑婦に身を落としたエスタ(Esther)が、姪のメアリが自分と同じ轍を踏むのを案じて行動するのも、家族愛によるものである。エスタは、メアリの代理母の役割を担っていると言えよう。

メアリは敗北者である父を保護し、打算的で軽率な恋愛の愚かさに気づき、ジェム(Jem)という良き伴侶を得て結婚し母となるが、叔母のエスタや親友のマーガレット(Margaret)、ジェムの母親ジェイン(Jane)やジェムの伯母のアリス(Alice)は、その全過程でメア리를援助する。このうち、エスタ以外はメアリとは血のつながりはないが、いずれも彼女の母親的な役割を果たしている。これらの女性たちに加えて、メアリにはマーガレットの祖父ジョウブ・リーという頼り甲斐のある相談相手がいる。

いっぽう、カースン家に代表される資本家の家庭は様子が違う。経済力のある父親が家族を支配している。経済的に恵まれていて生活の苦勞がないゆえに神をかえりみず、したがって信仰心や心の繊細さも育ちにくい。たとえば娘ソフィー(Sophie)は、作者によれば"too little in the habit of reading expressions on the faces of others"(240)であるために、兄のハリー(Harry)の死の知らせを聞いた女中の驚愕した表情にも気づけない。夫人は専業主婦で、召使がいて家事に手を染めなくてすみ、頭を働かす必要もないために知恵が働かないことを、召使たちから"Wind in the head"(237)と評されている。この家庭では少なくとも、ハリーの死という大事件が起こるまでは、家族で取り組まねばならない問題をかかえることがあまりなかったために、労働者の家族たちほどの心の結びつきもなく、何かが起きた際に一致団結するという雰囲気にもなりにくい。

労働者は心配の種が常にあってお互いを気遣い合い、時には他の者に心配をかけないために悩みを打ち明けず、ひとりで抱え込むというような生活であるからこそ家庭の幸せを実感できるのだとギヤスケルは考えていたようである。そしてこれは、ギヤスケル自身が私生活で実感していることでもあった。ギヤスケルの結婚後数年間の生活について、ジェリン(Winifred Gérin)による伝記に以下のような記述がある。

Elizabeth Gaskell had married a man burdened with a conscience like herself, and she whole-heartedly fell in with whatever voluntary work he took on in addition to his regular duties. In her first years of marriage, she shared in his Sunday School work and evening classes for boys. (Gérin 52)

ギヤスケルは中流階級の妻であったのでむしろカースン家に近い暮らしをしていたが、このように家事の他に夫の教会の仕事があって多忙だったという点では、労働者の妻たちに似ていたと言えよう。

(二) 人物たちの変化

アレグザンダー・ポープ(Alexander Pope)が"*To err is human, to forgive, divine.*"(Pope 16)と書いているように、人間は過ちや失敗を免れ得ない。ゆえに、『メアリ・バートン』においても登場人物たちが失敗を犯すのは不思議ではないが、ただこの小説の主要人物の過ちはいずれも人生を暗転させるか、あるいはその危険をはらんでいる。

人生を暗転させる危険をはらんだ過ちを犯しそうになる、という点では、まずメアリを挙げなければならない。彼女はハリー・カースンとの交際で過ちを犯しつつあることに気づき、危ういところで難を逃れる。いっぽう彼女の父親ジョンは、労働者のために闘うという目的は誤りではなかったかもしれないが、力を注ぐあまり手段を選ばなかったために殺人罪を犯し、取り返しがつかないことになる。しかも彼は、それによって望ましい結果は何ひとつ得られなかった。死の間際に彼は、周囲から罪の行為を義務であるかのように思わされて罪へと駆り立てられたことに関して申し開きをしたい気持ちになる。そしてジョウブ・リーに"*I did not know what I was doing, Job Legh; God knows I didn't.*"(432)と語り、ジョン・カースン(John Carson)に"*...say you forgive me the anguish I now see I have caused you.*"(432)と述べて許しを乞う。

この謝罪の言葉をかたわらで聞いていたジョウブは"*Forgive us our trespasses as we forgive them that trespass against us.*"(432)と言い、怒りを昂ぶらせたジョン・カーソンは"*Let my trespasses be unforgiven, so that I may have vengeance for my son's murder.*"(433)と言い放つ。ギヤスケルはこのカーソンの呪いの言葉を"*blasphemous words*"(433)と述べ、彼が警官を呼んで一刻も早くバートンを刑に処そうとするのを"*blasphemous action*"(433)だと述べている。

この第35章は"**FORGIVE US OUR TRESPASSES**"という題で、「自分が何をしているかわからなかった」という言葉を、ジョン・バートンを皮切りに三人の登場人物が口にすることになる。

その二人目は、ジョン・カーソンがバートンの家からの帰途に出会う見知らぬ少女だ。道ですれ違った少年によってふいに怪我を負わされた少女は、この少年は何をしているのかわからなかったのだからとがめないでくれと乳母に言う。

そして三人目がジョン・カーソンである。彼はバートンと通りすがりの少女の両者から聞いて

た異口同音の言葉が聖書のなかにあることを思い出して急いで帰宅し、殺された息子の誕生記念に買ったまま読まずに放っておいた聖書を開き、このイエスの言葉を探し出す。ジョン・バートンに対し憎悪の念しかもたなかった彼であるが、聖書の言葉を理解することにより、バートンに対する憐れみをも感じ始め、詫びるためにふたたびバートンの家を訪れる。そしてジョウブが言ったと同じ、聖書の言葉"Forgive us our trespasses as we forgive them that trespass against us."(438)を言って、死にゆくジョンを胸に抱く。

ジョン・バートンは死に臨んで、それまでの自分の人生についてジョウブ・リーに話す。かつて福音書に従って生活しようとしていた頃、アリス婆さんだけが賛同し応援してくれたが、周囲の者たちはただ労働者の権利獲得のために立ち上がれとあおるだけだった。波にのまれて冷静な判断力を失った彼は、自分よりもさらにひどい生活苦に苦しんでいる人たちを気の毒に思ういっぽうで、その苦しみを引き起こした人たちをも愛さなければという気持の板ばさみになって苦悩し、聖書の教えに従うことをあきらめた。

バートンは貧困に苦しみながらも、組合からの援助金を、自分よりももっと貧しい人たちに与えてくれと言って断り続ける。しかし組合は、組合に有利な働きをしてくれそうな労働者しか援助しようとしな。本当に援助を必要とする人こそ援助されるべきだと彼は考えているが、これこそが作者が理想とする組合のあり方であろう。

これについてパイク(Elizabeth Holly Pike)は次のように書いている。

The portrayal of the union in *Mary Barton* is of a group of men bound by "fierce terrible oaths" (*Mary Barton* 223) and swayed by a glib and opportunistic union organizer from London. . . . The unionists are shown as forcing everyone to think as they do, though how large a body "they" are is never defined. . . . John Barton's refusal of assistance from the union during hard times so that those who need help more might have it is praiseworthy, therefore, because it is an individual act against the self-serving intentions of the union. Just as Mr. Carson wants to keep his infirmary orders for active workers, not for those ill of fever, the union first offers assistance to "active, useful" (*Mary Barton* 133) members. (Pike 27-28)

このように、作中で描かれている労働組合は、大きなエネルギーとなって動いてはいるが、個々の構成員の幸福が活動の犠牲になり、本末転倒とも言える状態である。このエネルギーは労働者を救うという本来の目的から逸れ、雇用者に対し怒りをぶつけることや組合の存続に力を注ぎ、それが雇用者たちとの溝をさらに深めている。これはのちの短編小説「魔女ロイス」("Lois the Witch")で、主人公を魔女に仕立て上げる町の人たちと同様の群集心理である。

バートンは、かつて組合のことで苦悩した末に聖書の教えに従うのをあきらめ、その時から「墮落してしまった」("I've dropped down" 438)と、死に際に懺悔している。ここに、資本家をただ憎悪する労働組合の運動への、信仰者としてのギヤスケルの批判を読み取ることができる。

作中に何度か出てくる". . . they do not know what they are doing."というのは、イエスが自分を十

十字架にかけた人たちについて言った言葉である (Luke 23:34)。そして"Forgive us our trespasses as we forgive them that trespass against us."も同じく聖書中の祈りの言葉(Matthew 6:12)で、この祈りには". . . if you forgive men when they sin against you, your heavenly Father will also forgive you."(Matthew 6:12)という言葉もある。ギヤスケルはこれらの言葉をこの作品のモチーフにしている。自分が何をやっているのかわからないで行った行為により被害を受けても、加害者がそれを深く反省すれば、イエスが自分を十字架にかけの者に対して示したのと同じ寛容さで憎しみを棄て、加害者を許せるはずだということをギヤスケルはバートンとカースンの和解の場面で読者に訴えている。

ところで、犯した過ちを自覚するという姿勢をまったくもたないのがハリー・カースンである。この人物だけは他人を憐れんだり共感し合ったりする能力が完全に欠落している。この救いようのない徹底したわがまま者だけは、作者から反省の機会を与えられることなく死ぬ。

(三) バートンとカースンの和解の場面について

ベンジャミン・ディズレイリ(Benjamin Disraeli)は『シビル、または二つの国民』(*Sybil, or the Two Nations*)のなかで、相容れない労使の関係を「二つの国」("the two nations")と呼んだが、ギヤスケルも『メアリ・バートン』の第1章で、これを「二つの世界」("two worlds" 8)と表現している。マーガレット・ガンツ(Margaret Ganz)の見解によると、ディズレイリは両者間の超え難い溝について注目すべき指摘を行っているが、その指摘は『メアリ・バートン』中のギヤスケルによる指摘には及ばない。なぜなら社会問題に関するディズレイリの論評は政治的なレゾン・デートルをもっているためにその視野や効果が限定されているのに対し、ギヤスケルはゆとりのある人道主義的な考察に基づき、より広い視野から労使問題の解決方法を訴えているためだとしている。さらにガンツは、『シビル、または二つの国民』と『メアリ・バートン』を比較し、次のように述べている。

Whereas Disraeli's knowledge of social conditions was the result of planned research over a limited period of time, Mrs. Gaskell's grasp of the subject was the fruit of many years of personal experience with poverty in her husband's parish. While the mind of the one deftly exposed social ills with thoughtful indignation and a biting contempt for human exploitation, the heart and conscience of the other movingly dramatized the harrowing inequities of man's social condition. (Ganz 50)

これは『メアリ・バートン』の特質についてのまことに的確な要約である。

しかしいっぽうでガンツは、ギヤスケルは同胞愛の美しさとその有効性を劇的に演出するために、ジョン・バートンの死に際におけるジョン・カースンとの和解の場面において、二人

の思想の変化を単純に扱いきれずと批判している。二人の激しい憎しみ合いが双方のヒューマニティの目覚めによって一気に解消するこの場面は、この小説の"the weakest section"(Ganz 75)だということである。

ガンツの批評は、両者の憎しみ合いが激しければそのぶん和解には劇的な効果が伴うので、たいていの読者は熱中して読みすすだるだろうが、しかしジョン・バートンの臨終の場面で二人の心理の推移をもっと綿密に描写し、その和解を納得のいくものにしてほしかったという物足りなさを否めないだろうというものである。ガンツは"...we have all of us one human heart."(Ganz 76)という考えを認めさえすれば、政治経済学者たちのもつ精力的な自立の原理を、慈善的な相互依存というキリスト教的な理想に置き換えることができるというギヤスケルの確信に疑問を投じている。そしてギヤスケルが"too perceptive"(Ganz 76)であると述べ、"Thus Mr. Carson is more fully enlightened on his moral duties, yet not through the drama of additional experience as an employer or further psychological conflicts about his personal loss but through a didactic discussion."(Ganz 76)と批評している。これは、登場人物や語り手に作者の思想を語らせる際に、いささか説教じみた内容になりがちなギヤスケル作品についての的確な指摘であると言える。

(四)「社会小説」としての結末と「家庭小説」としての結末

この小説では、労働者である父ジョン・バートンの組合活動と娘のメアリの恋愛とが並行して展開する構成になっている。父は悲しい終末を迎えるが、娘はハリー・カーソンとのいわば「何をしているかわからずにいる」恋愛関係から脱皮し、ジェムと結婚する。

有能で真面目な労働者であるジェムは、無実であることが明らかになったにもかかわらず、世間から犯罪者に近いように扱われるため、カナダに移住する。これは理由のない差別感覚や労使問題以前の、働く人たちの仲間意識の改善の必要を読者に感じさせる。この点に関する限りでは、"... it was most desirable to have educated workers, capable of judging..."(457)とするジョン・カーソンの見解は正しいことになる。しかし松岡光治はジェムがマンチェスターを出て行くのは「逃避」で、ひいては作品の続きを描くことからの作者の「逃避」であるとし、以下のように述べている。

作品結末におけるメアリとジェムのカナダへの移住はマンチェスターの苛酷な現実からの逃避、換言すれば後日談による作者自身の語りからの逃避だと批判されても仕方がない。とはいえ、「英国人がお前のような大人しい男をとらえて投獄しちまうような間抜けになってからってもの、この国があまりよく思えなくなった」(459)と言って、息子について行くウィルソン夫人の言葉をギヤスケルの痛烈な英国批判として捉え、彼らの移住を積極的な活動と見なした方が、小説のテーマとは合致するかもしれない。(松岡 55)

引用中、断定は控えられてはいるが、ジェムが理解のある工場長の手配に感謝して移住するのは積極的な「活動」としては理解しがたい。ジェムがマンチェスターに留まって労使問題解決のために何らかのかたちで今後も闘いを続けるという筋書きのほうが、物語の筋書きとしては納得がいく。とは言っても、仮にジェムが英国で労働者としての生活を貫くことになれば、この作品はジェムを主人公とした「社会小説」になってしまい、作者はこの人物の挫折を描かざるを得なくなりそうである。あるいは逆に、ジェムが早くから技術者として努力し能力を身につけていたおかげで、マンチェスターを見限り家族を引き連れて新天地へ向かうことができたという見方をすれば、敗北ではなく積極的な「活動」だということになるだろうが、これも結局は労使問題そのものに向き合うことにはならないため、納得はしがたい。

家族には父親としての思いやりを示しながら労働者たちにはそれを示さない資本家カーソンをギヤスケルは冷酷な人物として批判しているが、労使問題に関するギヤスケルの見解について、ストーンマン(Patsy Stoneman)は以下のように述べている。

“. . .the middle-class father Carson is 'proud' of his son and daughter for being accomplished, well-dressed and well-mannered (Mary Barton: 107) – features which distinguish them from common humanity. The novel explicitly criticizes Carson for not extending the same sort of paternal care to his workers that they show for one another (e. g. p.458), and modern critics see this 'paternalism' as a weakness in Elizabeth Gaskell's political vision. . . . (Stoneman 72)

現代の批評家たちは契約で成り立つ労使関係において資本家に父権主義による情愛を求めるのは矛盾だと認識したうえで、ギヤスケルがおこなっているカーソン批判を彼女の弱点だとみるのだ、とストーンマンは指摘している。

資本家が家族愛で労働者に接しては、経営は成り立たない。ギヤスケル自身もカーソンを批判しながら自説の甘さに密かに気づいていたために、ジェムを農業機械に関する技術者にして小説を結んだのではないか。技術者は資本家が経営上で必要とする技能を備えているから、資本家はそれに値する待遇をせざるを得ない。したがって、技術者は労使関係から距離を置いた位置にいる。ギヤスケルはジェムをこのような、単純な労働者ではない職業に就かせることによって、労使問題を突き詰めることを回避したと考えることもできよう。

最終章は、ジェムとメアリの結婚でバートン家とウィルソン家が結ばれることによる新しい家族の情景の描写によって終えられている。場所はカナダで、月日もかなり経っている。ジェムとメアリの築く家庭には子どもがいて、ジェインは祖母になっており、併せて五人家族である。さらにギヤスケルは、視力が回復したマーガレットがウィルと結婚し、祖父のジョウブと連れだってカナダのウィルソン家を訪問するという予告で小説を結んでいる。多くの読者は、社会小説というよりも家族愛をテーマにした小説だったという読後感をもつだろう。

ジェムは、ジョン・バートンや父親のジョージ(George)とはちがって、労働組合の活動には

参加しない。メアリは専業主婦となり、夫の収入が安定しているために手内職はしなくてもすむ。召使を雇うほどに豊かではないので、義母であるジェインと協力し合って家事や育児にいそむ。こういう家庭では、全員が家族への帰属感が強い。

このような生活は、カースン家に代表される資本家には見られないものであると同時に、労働者階級の女性たちが羨望する家庭の姿であろう。

メアリの親友で、お針子として賃金を稼いでいたマーガレットは視力を失うが、いわばその代償として神から音楽の才能を与えられ、歌手としてお金を稼ぐようになる。彼女はメアリのよき理解者である。おそらくはそのやさしさを神に認められて視力を取り戻し、ウィル(Will)というよき伴侶に恵まれて結婚する。これも資本家の家庭においては一般的でないかたちの夫婦であろう。

ギヤスケルは「二つの世界」を融和させてこの作品を終えたかったが、それは理想として掲げるにとどまった。しかしそれでも、労使関係や労働者の暮らしを描き、資本家と労働者の双方がキリスト教倫理による秩序ある生活をするように提唱している点で、『メアリ・バートン』は注目すべき作品である。

さて、最終章の直前、第37章の最後にジョン・カースンは、資本家と労働者が金銭上の契約だけでなく、"the ties of respect and affection"(458)によって結ばれることが望ましいと考え、雇用制度の改善に力を尽くしたと書かれているが、それは実現しただろうか。

カースンは復讐を正当化する憎悪の言葉を吐いてバートン家を去る途中、通りすがりの少女の言葉を聞いて聖書を開くことを思い立つ。この偶然がなければ、彼は聖書の内容に心を動かされバートンの死に立ち会うことはなかったはずである。彼はバートンから、貧しくて猩紅熱を患っていたわが子に食べ物を買えずに死なせてしまったという話を聞き、愛児を失った者同士の悲しみを共有し、信仰に目覚めるが、これは特異なケースである。したがって、このような特異な経験をしていない他の経営者たちに彼の新しい経営方針への同意を期待できるとは考えにくい。このためギヤスケルは、ジョン・カースンの目指す改善が、"yet to be carried into execution"(458)という予告に留めざるを得なかった。

ギヤスケルは一種の使命感で労働者の実態を描いてきたが、最終章では労使問題を離れて二組の結婚を読者に報告して作品の結びとした。ゆえにこの第37章のジョン・カースンのその後の取り組みの予告が、労使問題そのものについての結末だと言えるだろう。

バートンとカースンの和解について、大阪教育図書版『メアリ・バートン』の作品解説には以下のように書かれている。

この二人の和解は、貧富の差がもたらす問題、労使関係の問題について何の解決策にもならなかっただろう。しかし、現実をありのままに描こうと目指すギヤスケルにとって、現に進行中のこの混沌とした問題について、個人的に相手を理解し思いやる精神による和解を示すこと以外できななかっただろう。それにこの精神が基底になれば、どんな有効な解決策も生まれるはずはない。そしてこの問題は今もなお解決されてはいないのだ。

(直野 442)

これは、資本主義が成熟した現在の視点に立った整然とした解釈である。ここに指摘されているように、個人間の和解が社会体制の変革にまで発展するということは実際には想像できない。しかし労使間の対立関係の解消を強く望んだギヤスケルは、社会思想家でも経済学者でもなかったため、解決への糸口としては労働者と事業家との相互理解を個人間の和解というプライベートな情景でしか提示できなかった。彼女は願いを込めてバートンとカースンとの和解と、その結果としてのカースンの新しい事業家としての覚醒を描いた。そして最終章では固い社会問題から離れ、安らいだ気分で家庭の幸福を語って小説を結んだのである。

引証資料

Ganz, Margaret. *Elizabeth Gaskell: The Artist in Conflict*, New York: Twayne Publishers, Inc., 1969.

Gaskell, Elizabeth. *Mary Barton*, World's Classics, New York: Oxford University Press, 1987.

(テキストからの引用はこの版を用い、頁数を括弧内に記す)

Gérin, Winifred. *Elizabeth Gaskell: A Biography*, Oxford: Oxford University Press, 1976.

Pike, Elizabeth Holly. *Family and Society in the Works of Elizabeth Gaskell*, New York: Peter Lang Publishing Inc., 1995.

Pope, Alexander. *Essay on Criticism*, London: Macmillan and Co., Limited, 1950.

Stoneman, Patsy. *Elizabeth Gaskell*, Sussex: The Harvester press, 1987.

直野裕子「解説」直野裕子訳『メアリ・バートン』大阪教育図書、2001年。

松岡光治「メアリ・バートン」松岡光治編『ギヤスケルの文学』英宝社、2001年。

『クリスマス・ストーリーズ』（その2）

Charles Dickens, *Christmas Stories* – Part II

藤本 隆康訳

Takayasu FUJIMOTO

学生の話

今のところ僕はまだ若いので——歳は重ねていますが、それでもまだ若いと言っていいでしょう——皆さんにお話しするほど、これといった冒険はしていません。牧師がいかにけちん坊であるとか、あの先生がいかにグリフィンのような女であるとか、二人がいかにその食欲さを親にまで及ぼして法外な金を要求するとか——とりわけ散髪代や医者診察代ですが——といったことをお話ししても、興味はお持ちにならないでしょう。私たちの同級生の一人が錠剤二粒の代金として——一錠で六シリング三ペンスでも高すぎると思います——しかも、彼はその錠剤を飲みもしないで、彼のジャケットの袖に入れていただけでした——半学年分の料金を請求されたのです。

牛肉と言えば、それはひどい代物です。それはとても牛肉と呼べるものではありません。本当の牛肉は筋張ってはいません。本物の牛肉なら噛みこなすことができますし、それに肉汁が出ますが、僕たちに出されるものには一滴の肉汁もありません。さらに別の同級生が具合を悪くして帰宅し、掛かり付けの医者が、お子さんがおかしくなったのはビールを飲んだためとしか考えられません、と父親に言うのを聞きました。もちろん、具合がおかしくなったのはビールのせいでした。きっとそうです！

しかし、牛肉とオールド・チーズマンのことでは、話は別です。ビールもそうです。僕が話したかったのはオールド・チーズマンのことです。同級生たちが利得の犠牲になってどうして身体を壊すことになったか、そんな話をするつもりはありません。

そう、パイ皮を見るだけで分かります。少しもふっくらしていません。堅くて——まるで湿った鉛みたいで。それを食べると、同級生たちは悪夢にうなされ、他の生徒たちの名を呼んで起こすからといって枕を投げつけられます。当たり前です！

オールド・チーズマンは、ある夜、夢遊病状態になってナイトキャップの上に帽子を被り、釣り竿とクリケットのバットを手にして応接間に入って行きました。そこにいた人たちは彼の姿を見て、当然ながら幽霊だと思いました。いや、彼がちゃんとした食事を与えられていたら、そんなことはけっしてしなかったでしょう。僕たちが皆そろって夢遊病になったりしたら、学

校の関係者はおそらく自分たちの行為を後悔することになるでしょう。

オールド・チーズマンは当時ラテン語の教師補佐ではなく、彼自身も生徒でした。初めて駅伝馬車で学校に連れて来られた時、彼はまだとても小さく、連れて来たのは常に嗅ぎ煙草を吸っている女性でした——彼はそれだけは何とか覚えていました。彼は休暇になっても帰省することはありませんでした。経費（彼は余分の科目を勉強することはありませんでした）は銀行に送られ、銀行がそれを支払っていました。彼は茶色のスーツを年に二度身につけ、十二歳になってブーツに足を入れるようになりましたが、それもスーツ同様に彼にはいつもぶかぶかでした。

真夏の休日になると、学校のすぐ近くに住んでいる数人の生徒たちが学校にやって来て、運動場の塀の外にある木に登り、独り残って本を読んでいるオールド・チーズマンをこっそりと見ていました。彼はいつも柔和そのものでした——それも、度が過ぎるほどでした。ほんとうです！——ですから、彼らが木の上から口笛を吹くと、彼は目を上げて頷き、「おーい、オールド・チーズマン、夜は何を食べたの？」と聞かれると、「茹でた羊肉だよ」と答えて「ちょっと厭になることもある」と言うのです。それから彼らは「じゃ、さようなら、オールド・チーズマン」と言って、また木から下りるのです。もちろん、休みの間中オールド・チーズマンに茹でた羊肉しか与えないということは、彼の優しさにつけこむことですが、それはごく当たり前のことだったのです。茹でた羊肉を与えない時には、彼にライスプディング1を食べさせ、それで肉屋への支払いを節約していたのです。

オールド・チーズマンはそうした日々を送っていました。休暇になると、孤独を味わう上に、他の悩みがありました。休みが終わって仲間たちがいやいや学校に戻り始めると、彼はいつも彼らとの再会を楽しみにしていましたが、彼らが彼に逢って少しも喜ばないと、彼はひどく心を痛めて壁に頭を打ちつけ、それで鼻血を出していたからです。しかし、彼は概して皆に好かれていました。一度は彼のために寄付が募られ、彼を元気づけようと休暇に入る前に、二匹のハツカネズミ、一羽のウサギ、一羽のハト、それに可愛い子犬が彼に贈られました。オールド・チーズマンは感極まって涙を零しました——特にそのすぐ後でその贈物同士が食べ合うと、今度は悲しみの余り泣き出してしまいました。

もちろん、オールド・チーズマンはあらゆるチーズの名で呼ばれていました——ダブル・グロスター、ファミリー・チェッシャーマン、ダッチマン、ノース・ウィルトシャーマンとか何とか呼ばれていたのです。しかし、そんな呼び方をされても、彼は少しも気にしていませんでした。彼は、その年齢から「オールド」と呼ばれているわけではありません——年なんか取っていなかったからです——彼は最初からただ「オールド・チーズマン」と呼ばれていたのです。

やがてオールド・チーズマンは、ラテン語の教師補佐になりました。彼はある朝、新学期が始まった時に、「チーズマン先生」という教師として生徒に紹介されました。すると私たち生徒は、オールド・チーズマンが敵陣に寝返り、金で身を売ったスパイで裏切り者であると、こぞって決めつけました。彼が雀の涙ほどの金——噂によると、四半期で二ポンド十シリング、それに洗濯代ということでしたが——で買収されたといっても、それは身の潔白の証にはなりま

せんでした。その件で私たちは議会を開催し、オールド・チーズマンが寝返ったのはただ金銭が目当てであり、「心臓の血をドラクマ金貨に鋳直した」2男だと決めつけました。議会は、ブルータスとキャンアスの言い争いの場面からその表現を借用したのです。

こうして、オールド・チーズマンが恐るべき裏切り者で、私たち生徒の秘密を巧妙に嗅ぎつけ、学校側の恩顧を得る目的で、彼が得た情報をすべて密告した男であると、誰もが確信しました。彼に反旗を翻すために、勇敢な生徒たちすべてが率先して委員会に入会するよう求められました。委員会の会長はボブ・ターターという首席の生徒で、彼の父親は西インド諸島にいて、彼には何百万ポンドの資産があると自認していました。彼は生徒の間に絶大な力を誇っていて、次のようなパロディを書きました——

「いとも柔和な顔、
話す言葉も聞き取れぬ、
されど、卑劣な密告者、
そはオールド・チーズマン」

——こうした十数編の詩を書いて、彼は毎朝、新米の教師の机のすぐ傍に行ってそれらを謳っていました。彼はまた、低学年の生徒の一人をしつけてオールド・チーズマンをからかっていました。その少年は赤い頬をした小さなブラス（鉄面皮な子）で、平気で何でもやる生徒でした。ある朝、彼はボブに命じられてラテン語文法の教科書を持って教師のところに行き、こんなことを言うのでした： ノミナティヴス プロノミヌム（主格代名詞）——オールド・チーズマンは、ラロ エクスプリミトゥール（うすぼんやり）——疑いもなく、ニシ ディステインクティオニス（区別するなら）——密告者である、アウト エンファシス グラティア（目立たないように）——やがてその正体が明らかになった。ウト（もし）——例えば、ヴォス ダムナスティス（ならず者）で——お前は生徒たちを売った。クワジ（まるで）——ディカト（言うなれば）——そう、——プラテリア ネモ（誰あろう）——私はユダだ！ 彼の髪は前々から薄かったのですが、日毎に薄くなっていきました。顔は日に日に青ざめ、やつれていきました。夕方になると彼は時々机の前に座って、愛用の柄の長いろうそく消しで火を消したり、両手で顔を覆ったりして泣いていました。しかし、委員会の誰も、その気持ちがあっても、彼を哀れむことはできませんでした。オールド・チーズマンが追い込まれたのは、彼自身が良心に背いたからだと言ったからです。

オールド・チーズマン相変わらず周囲を気にすることなくわが道を歩いていましたが、けっして惨めな生活を送っていたわけではなかったのです！ 牧師は彼を鼻であしらい、もちろんあのグリフィンのような女教師もそうでした——二人とも全ての教師に対していつも同じ態度を取っていたのです——しかし彼は、生徒たちにいちばん悩まされていて、しかも絶え間なく苛めに遭っていました。彼はそのことをひと言も人に零さず、従って生徒たちの委員会は、彼の卑劣な言動を見つけ出すことができませんでした。かと言って、それで彼が面目を施したわ

けではありません。会長が、何も密告しないのは、オールド・チーズマンが臆病だからだ、と言っていたからです。

オールド・チーズマンには世界でただ一人友達がいました。その友達というのは彼と同じように、温和な女性でした。ジェインだったからです。ジェインは生徒たちの衣類の面倒を見て、衣装箱の整理に当たっていました。彼女は見習いのような資格で初めて学校にやって来たように思います——生徒たちの中には慈善施設から来たと言う者もいました——見習い期間が終わった後も、彼女は一年も学校に留まっていた。いや、わずか一年しか留まっていなかった、と言うべきでしょう、それはとてもあり得ない話だからです。しかし、彼女は貯蓄銀行に数ポンド預けていました。彼女は若くて素晴らしい女性で、必ずしも器量はいいとは言えませんが、率直かつ誠実で、朗らかな顔をしていて、生徒たちの誰もが彼女を好いていました。彼女は実に快活で身だしなみが良く、実に和やかで優しい女性でした。生徒の母親に何かあると、その生徒は手紙をまずジェインの所に持って行ってそれを彼女に見せるのでした。

ジェインはオールド・チーズマンの友達でした。委員会が彼を苛めれば苛めるほど、ジェインは彼を元気づけていました。彼女は折りにふれて、食料貯蔵室の窓から朗らかな顔を彼に向け、その日は、それだけで彼は元気になっていたようでした。彼女はよく果樹園と菜園（そうです、いつも錠が掛けられていました）を通して、他に行き来する場所があるのにわざわざ運動場を横切り、オールド・チーズマンに目をやって、「元気をお出しなさい！」と言っているようでした。彼の前掛けは実にこざっぱりとしていてきちんと整えられていたので、彼が机に就く時にそれを整えてやっているのが誰であるか、皆よく知っていました。そして、夕食の時、湯気の立つほかほかのダンプリングが彼の皿に載せて出されると、生徒たちはそれを出したのがジェインであると分かり、憤慨していました。

こうした事情のもとで、委員会は何度も会合と討論を重ねた結果、オールド・チーズマンを黙殺するようジェインに求め、もし彼女がそれを拒むなら、彼女との絶交はやむなしとの結論に至りました。で、会長を団長とする代表団が結成され、ジェインに面会して委員会が苦渋の思いで可決した決議を彼女に伝えることにしました。彼女は心優しい女性で、誰もが彼女に深い尊敬の念を抱いていました。かつて彼女が、人を思いやる優しい気持ちから、牧師の書斎で彼を待ち受け、一人の生徒を厳しい罰から免れさせてやったという噂がありました。それ故、代表団はその任務に気後れを感じていましたが、ジェインのもとに参上し、会長は委員会の決定を余すことなくジェインに具申しました。それを聞くとジェインは顔を真っ赤にしてどっと涙を流し、いつもの彼女とは思えないほどの口調で、団長と代表団に向かって、あなたたちは徒党をくんだ悪意に満ちた残忍な生徒たちです、と言って栄えある代表団全員を部屋から追い出しました。その結果、委員会の記録簿（秘密を守るため天文学的な量の符牒が書き込まれていました）に面会の記録が記載され、今後はジェインと関わることがいっさい禁じられ、会長はオールド・チーズマンの破滅を謀るこうした当然の要求を委員会に訴えかけました。

しかしジェインは、オールド・チーズマンに対して誠実な態度で接し、それに反して彼女は私たち生徒に不誠実な態度を取っていました——と言っても、それは生徒たちの勝手な解釈で

す——ジェインは相変わらず彼にとって唯一の友であり続けました。そのことは協会(委員会)にとっては癩しかくの種でした。ジェインが彼をますます有利にする一方で、生徒たちはそれだけ不利益を被っていたからです。そして、彼らはオールド・チーズマンに対する恨みをますます募らせ、以前よりもいっそう彼に辛く当たるようになりました。ある朝、ついに、机から彼の姿が消え、彼の部屋を覗くと、そこは蛻もめけの殻になっていました。生徒たちは青ざめた顔をして、オールド・チーズマンが辛抱しきれなくなり、朝早く起きて入水自殺したのではないかと囁き合っていました。

朝食後、他の教員たちの謎めいた表情に加えて、オールド・チーズマンがいなくても彼らが少しも不審に思っていないという事実から、委員会は自分たちの考えに間違いないと確信しました。生徒の中には、会長が縛り首か、あるいはただの終身流刑か、そのどちらかを受けざるを得ないだろう、と言い出す者もいました。そして会長は、そのどちらを受けることになるのだろうと、不安で顔を曇らせていました。しかし彼は、この国の陪審は自分が勇敢な男であることを弁えるべきであり、自らの真情に悖らない評決を彼らに求め、大ブリテン人として密告者を容認するのか、そしてそれで陪審員の矜持きやうぢが持てるのか、意見を述べさせることにする、と言いました。委員の中には、彼がただちに逃亡して森に逃げ込んだ方がいいと助言する者もいました。森に入れば、木こりに変装して、黒莓いぼごの汁を顔に塗って姿を晦くらますことができるというのでした。しかし、大多数の者は、彼が男らしく一步も引かなければ、彼の父親——西インド諸島に在住し、何百万ポンドの資産家であるということなので——が金の力で彼を釈放するものと信じていました。

牧師が定規を手にして部屋に入り、さながら古代ローマ人あるいは陸軍元帥を思わせる姿——一席ぶつ前に彼はいつもそんな感じを与えました——を見せると、皆の心臓は恐怖で早鐘を打っているようでした。しかしその恐怖は、彼が驚天動地の話を切り出したことで吹き飛んでしまいました。彼はオールド・チーズマンのことを「この楽しい学問の野原を歩む敬愛すべき古くからの巡礼の友」と呼び——その通り！ まさに凶星です！——彼が父親の意に反して結婚した勘当された娘の孤児で、彼女は悲嘆に暮れて亡くなり、その不幸な赤子(オールド・チーズマン)は祖父の金で育てられたが、彼はオールド・チーズマンが赤子から少年になり大人になっても、けっして彼に逢おうとはしなかった、その祖父がもうこの世から去り、いい気味だ——これは私の言った言葉です——祖父の莫大な資産が、遺言がなかったため、現在、急な話だが、永久にオールド・チーズマンのものになった、と言ったのです！ 牧師はうんざりするほど聖句を引き合いに出した挙句、この楽しい学問の野原を歩む敬愛すべき古くからの巡礼の友は、二週間後に「もう一度、こちらに来られる」、その時、もったきちんとした形で私たちに別れを告げたいと願っておられる、と言って話を締めくくった。話し終えると、彼は私たち生徒に厳しい目を注ぎ、もったいぶった足取りで部屋を出て行きました。

事態が一変し、委員会の会員たちは驚きで呆然としていました。多くの会員たちは会を脱退したいと思い、さらに多くの生徒たちは会員になったことはない、知らぬ半兵衛を決め込み始めました。しかし、会長はあくまで引き下がらず、踏み止まるか共倒れになるか、そのどち

らかを選ぶしかない、もしそれができなければ、僕は死ぬ他ない、と言いました——それは会員に発破を掛けようとしたものでしたが、効き目はありませんでした。会長はさらに、会員たちの置かれた立場を考慮し、数日後に最善の考えと助言を伝える、と言いました。私たちは首を長くしてその日を待ちました。彼の父親が西インド諸島にいるということで、彼が世間に通暁していると思っていたからです。

会長は毎日、毎日熟慮を重ね、石版いっぱい軍隊の配置を描いた後、私たち生徒を招集し、考えを明らかにしました。彼は、オールド・チーズマンが指定された日にやって来れば、彼はまず委員会を告発し、皆に体罰をうけさせるのは明らかである、と言いました。オールド・チーズマンは、鞭打ちによる敵の苦痛を嬉しそうに眺めたり、その泣き声を聞いて溜飲を下げたりした後、話をしたいと言って、おそらく私室——たとえば、一度も使われたことのない二つの大きな地球儀が置かれていて、親との面談に使われる応接間——に牧師を招き入れ、その部屋で、彼によるさまざまな虐待やまやかしに耐えてきたと言って彼のことを槍玉に挙げるだろう、というわけです。話しを締めくくるに当たって、オールド・チーズマンは廊下に潜ませておいたプロボクサーに機会を窺って合図を送り、それを見てボクサーが部屋に入り、気を失うまで牧師を打ちのめすことになる、それからオールド・チーズマンはジェインに五ポンドから十ポンドほどの金を贈り、悪魔のように勝ち誇って学校を後にするだろう、と言うのでした。

会長は、この手筈を実行するに当たって、応接間やジェインに対する備えは万全であると説明し、あとは委員会として徹底的に抗戦することだけである、と言って私たちを促しました。この計画を果たすために、彼は全ての生徒に次のような忠告をしました。それは、利用できる全ての机に石を詰め込み、オールド・チーズマンが苦情を言い始めた刹那、全ての生徒に合図を送る、それに応じて生徒たちはオールド・チーズマンにいっせいに石を投げつける、というものでした。この大胆な忠告によって委員会の士気が上がり、その計画は満場一致で受け入れられました。運動場にオールド・チーズマンの背丈と同じ棒を立てられ、生徒たち全員がそれに向かって石を投げる練習を続け、棒はでこぼこになってしまいました。

ついにその日になり、それぞれ決められた席に就くよう点呼され、誰もが震えながら腰を下ろしました。はたしてオールド・チーズマンが来るかどうか、わいわいがやがやと議論が交わされましたが、彼がお仕着せを着た二人の召使いを前方に、そして後部に変装したプロボクサーを乗せた四頭立ての馬車に乗って意気揚々として現れる、というのが大方の見方でした。で、全ての生徒たちは座ったまま、車輪の音がしないかと耳を澄ましていますが、何も聞こえませんでした。と言うのも、結局オールド・チーズマンは少しも構えることなく歩いてやって来たからです。彼は黒い服を着ていましたが、それ以外は普段と変わった様子はまったくありませんでした。

「諸君」と牧師が彼を紹介して言いました、「この楽しい学問の野原を歩む敬愛すべき古くからの巡礼の友が、ひと言君たちに挨拶をしたいと言っておられる。傾聴したまえ、諸君、いいな！」

誰もが手を机の中に突っ込み、首領（会長）に目をやりました。彼はすでに投石する構えを

見せていて、目でオールド・チーズマンに狙いを定めていました。

ところが、オールド・チーズマンは何をしたでしょう？ 彼はただ彼の座り慣れた机に歩み寄り、優しい声を震わせながら「愛する皆さん！」と言ったのです。その目には涙が浮かんでいるようでした。

誰もが机に入れていた手を引っ込め、首領は泣き始めました。

「愛する皆さん」とオールド・チーズマンが言いました、「皆さんは私が幸運に恵まれたことを耳にされていると思います。私は長い年月を——これまでの私の全人生とっていいでしょう——この学校の屋根の下で過ごしてきましたので、あなたたちはそれを聞いて私のために喜んで下さっていると思います。あなたたちが一緒に喜んでくれないければ、私はとても自分の幸運を喜ぶわけにはいきません。私と皆さんとの間に少しでも行き違いがあったとしても、皆さん、どうかそれを許し合い、忘れましょう。私は心からの感謝の気持ちを込めて、皆さんの一人ひとりと握手をしたいと思っています。皆さん、私はそのために迷惑を承知で再び学校の門をくぐりました」

首領が泣き出したため、あちこちでわっと泣き声を上げる生徒もいました。しかし、オールド・チーズマンがまず首領の前に立ち、愛情を込めて彼の肩に左手を置き、右手を差し伸べ、そして首領が「いや、僕にはその資格はありません、ほんとうに僕にはそんな資格はありません」と言うと、学校中の生徒がすすり泣いたり、声を上げて泣いたりしていました。全ての生徒が、そうだ彼にはそんな資格はない、と異口同音に言いました。しかしオールド・チーズマンはそんな声に頓着せず、全ての少年たちと嬉しそうに握手し、その後に教師たち全員と挨拶を交わし——その締めくくりとして、校長に挨拶しました。

いつも何かと罰を受けていた泣き虫の小さな生徒が、部屋の隅から「オールド・チーズマンに栄えあれ！ 万歳！」と甲高い声で叫びました。すると校長が彼を睨みつけて言いました、「チーズマン氏」と言いなさい。しかしオールド・チーズマンが、そんな呼び方よりも馴染みの名前の方がずっと気に入っていますと言うと、全生徒が同じ喝采を叫び、足を踏み鳴らし手を打ち鳴らす雷鳴のような音、そしてオールド・チーズマンと叫ぶ轟くような声がいつまでも止みそうにありませんでした。

その後、目を見張るほど立派な食堂に豪華なご馳走が並べられました。鶏肉、舌肉、砂糖煮、果物、砂糖菓子、ゼリー、ニーガス4、大麦糖5でできた寺院、トライフル6、クラッカー——何でも食べることができ、何でもポケットに入れて持ち帰ることができました——費用はすべてオールド・チーズマンが出していました。その後、演説が幾つか行われ、その日は全日休講となり、あらゆる種類のゲーム、ロバの背に跨ったり子馬の牽く二輪馬車に乗ってそれを走らせたりするといった、あらゆる種類の遊びを自由気儘に二度、三度と繰り返し、教師全員が「七つ鐘」亭で食事を取り（生徒たちは、一人当たり二十ポンド掛かっていると推測していました）、毎年この日と、オールド・チーズマンの誕生日を休日とすることが決められました——それを取り消さないように、生徒たちは自分たちの前で校長にそれを認めさせました——経費はすべてオールド・チーズマンの負担でした。

そうです、生徒たちは「七つ鐘」亭に大挙して繰り出し、その外で喝采しました。大喜びで万歳を叫んだのです！

話はまだ終わりません。次の話し手を見ないようにして下さい。まだ続きがあります。翌日、生徒会はジェインと和解すること、その後、会を解散することを決定しました。でも、ジェインが学校を去ったことを皆さんはどう思われるでしょう？ 「何だって？ もう帰って来ないの？」と、私たち生徒は悲しそうな顔をして言いました。私たちが聞き出すことができたのは「そう、それは確かです」という答えだけでした。学校中の誰もが、そのことについては何も語ろうとはしませんでした。ついに、首席の生徒が大任を買って出て、私たちの長年の友人であるジェインはほんとうに学校を去ったのですかと校長に尋ねました。校長（彼には娘がいました——鼻が上に向き、赤ら顔の娘です）は、「そうです、ミス・ピットは学校を辞めました」と厳しい口調で答えました。ジェインがミス・ピットと呼ばれるとは！ 彼女がオールド・チーズマンから金を盗んで勘気に触れて去って行ったという者がいたり、一年に十ポンドほど昇給してもらってオールド・チーズマンに仕えていると言う者もいた。私たちに分かっていたのは、彼女がいなくなったということだけだった。

それから二、三ヶ月経ったある日の午後、校地に隣接するクリケット場に紳士と淑女を乗せた無蓋の馬車が止まりました。彼らは長い時間クリケットの試合を眺め、立ち上がって選手のプレイを見ていました。誰も彼らのことは気にしていませんでしたが、やがて例の泣き虫の少年が、見張りをするための持場を離れて、規則にお構いなく競技場に入って来ると、「あれはジェインだ！」と言ったのです。両イレヴンは試合をそっち退けにし、すぐさま馬車に殺到しました。まさにジェインだったのです！ しかも、素晴らしいボンネットを被って！ 信じられないでしょうが、ジェインはオールド・チーズマンと結婚していたのです。

間もなく、私たちが運動場でクリケットの熱戦を繰り広げているとき、高い塀が低くなっている所に一台の馬車が止まり、その馬車の乗った紳士と淑女が立ち上がって塀越しに私たちの試合を眺めるのが恒例になりました。紳士というのはいつもオールド・チーズマンで、淑女はジェインでした。

私が二人を初めて目にしたのは、紳士淑女になったそうした彼らの姿でした。それから、私たち生徒の間にもさまざまな変化がありました。ボブ・ターターの父親は思われていたほどの資産家ではなく、取るに足らぬ人物でした。ボブは軍に入隊しましたが、オールド・チーズマンが金を出して、彼を除隊させてやりました。しかし、馬車には変化はなく、それが塀の所で止まると、私たちはすぐに試合を中断するのです。

「結局、あなたたちは私をコヴェントリに送る（絶交する）ことはしなかったのね！」と夫人は、握手を求めて生徒たちが塀の所に殺到すると、笑いながら言ったものです、「そんなこと、二度としないわね？」

「しません！ しません！ しません！」と至るところから声が上がりました。

彼女がその時どんな気持ちでいたのか私には分かりませんが、今ではもちろん分かっています。でも、私は彼女の顔つきや優しい物腰がとても好きで、思わず知らず彼女に目を向けてし

まうのです——彼に対してもそうです——生徒たちは皆嬉しそうに二人の周りに群がっていました。

間もなく、彼らは私が新入生であることに気づきました。そんなわけで、私は他の生徒と同じように塀の所に群がって握手をしてもいいのではないかと思いました。私は皆に負けず劣らず二人に逢うことが嬉しく、すぐに親しくなりました。

「休暇まで」とオールド・チーズマンが言いました、「あと二週間ですね。居残る人は？ 誰かいますか？」

多くの指が私を差し、多くの声が「彼です！」と叫びました。その年は、親戚の方々が家を空けていて、学校に残らなければならず、正直なところ、私は少し気持ちが塞いでいました。

「ああ！」とオールド・チーズマンが言いました。「休暇中に学校に残るのは寂しいものです。私たちの家にいらっしやい」

私はその言葉に甘えて彼らの家に行き、この上なく楽しい時を過ごしました。彼らは少年に対してどう振舞えばよいか心得ています。この二人だからこそ分かっているのです。例えば、彼らが芝居に少年を連れて行くとき、彼らはほんとうに少年のことを思って連れて行くのです。芝居が始まった後で劇場に入ったり、それが終わる前に出たりするようなことはしません。彼らは男の子の育て方も、きちんと弁えています。二人の間に生まれた男の子を見れば分かります。その子はまだとても幼いのですが、ほんとうに素晴らしい子です！ そうです、オールド・チーズマン夫妻に次いで、私はその子が大好きになりました。

さて、オールド・チーズマンの話は以上です。結局、面白い話にはならなかったようですね？

注

- 1 牛乳と米で作った甘いプディング。
- 2 『ジュリアス・シーザー』四幕三場、第七十六行参照。
- 3 原語は「コヴェントリに送る」の意であるが、かつてコヴェントリの住民たちが兵士を忌み嫌い、この地に派遣された兵士を除け者にしたことに困んでいる。
- 4 ぶどう酒に湯・砂糖を入れ、それにしばしばニクズクやレモンを加えた飲料。
- 5 大麦を煮た汁と砂糖を煮詰めて作った飴。しばしば振り棒状になっている。
- 6 ジャムと砕いたマカロンをのせ、酒を振りかけたスポンジケーキ。

無名氏の話

彼は、茫漠とした未知の大海原に向かって絶え間なく静かに滔々と流れ込んでいる、広くて深い大河の土手に住んでいました。その河は、天地開闢以来、淀みなく流れ続けていました。その河は水路を変えたこともあり、新たな流れとなって、以前の水路は干乾びた荒地になって

いましたが、時の続く限り変わることなく、滔々と流れ続けることでしょう。何であれ、その底知れない強大な流れに逆らって進むことはできませんでした。生物、花、葉っぱ、それに有機・無機の粒子も、ことごとく未知の海原へと押し流されていました。潮流は抗いようもなく海原へと向かい、地球が公転を止めることがないのと同じように、その流れはけっして止まることはありませんでした。

彼は賑やかな場所に住んでいて、額に汗して働いていました。彼は骨身を削って働かなくても一ヶ月を暮らせるだけのお金を持って暮らすといった希望さえ持つておらず、苦勞を進んで買って出て、不平を零すことはありませんでした。それは誓って言えます。彼は膨大な家族の一人で、その息子や娘たちは朝早く起きて夜寝るまで、長時間に亘って働き、日々の糧を得ていました。彼はその運命に甘んじていて、それ以上の期待は抱かず、何も求めてはいませんでした。

彼が住んでいる界限では、やたらに太鼓を鳴らしたり、トランペットを吹いたり、演説が行われたりしていました。しかし、そんな騒ぎは彼には無縁なものでした。そうした耳障りな大騒動はビッグウィッグ家から発しているもので、彼はその一族の不可解な行為に驚愕していました。彼らは入口の前に、鉄、大理石、青銅、真鍮などの不可思議な彫像を建て、幾つもの異様な馬像の脚や尻尾で彼の家は翳っていました。彼は何のためにそんなことをするのか訝りながらも、彼独特の無骨な善良さでそれを笑い過ごし、辛い仕事を続けていました。

ビッグウィッグ家（彼らは近所で大尺風を吹かしていて、誰もがこの上なく騒々しい人たちでした）では、彼が自分でものを考える面倒を省いてやり、彼自身の身の振り方や彼の仕事の処理を肩代わりしてやろうとしていました。「ほうんとうのところ」と彼は言いました、「私にはほとんど時間の余裕がありません。もしあなた方が私の支払うお金（税金）の見返りとして親切に私の面倒を見て下さるのであれば」——彼はビッグウィッグ家にお金を納めるだけのことはできたからです——「私は不安なく暮らすことができ、心から感謝します。あなた方は最善の道をご存知だと思いますから」かような次第で、太鼓が打ち鳴らされ、トランペットが奏でられ、演説が行われ、醜悪な馬の像を彼はひれ伏して拝むよう求められたのでした。

「私は何が何だか分からない」と彼は皺のよった額を擦りながら言いました、「でも、私には分からなくても、たぶんそれなりの理由はあるんでしょう」

「それは」と、彼の言葉に疑念を嗅ぎつけたビッグウィッグ家が答えました、「最高の、そして最も功績のある名誉と栄光を表すものです」

「ああ！」と彼は言いました。それを聞いて彼は喜んでいました。

しかし、鉄、大理石、青銅、真鍮の彫像の間に立ってそれらに目をやった時、彼はかつて郷土で立派な功績を残したウォリックシャーの羊毛商の息子であるとか、そういった同郷の貢献者の像は一つとして見つけることはできませんでした。英知によって心身を蝕む恐ろしい病から彼や彼の息子を救ってくれ、勇敢な行動で彼の祖先を奴隷状態から解放し、想像力を賢明に働かせて世の底辺に沈んでいる人たちを新たなより高い存在に引き上げ、技術の開発によって労働者の世界に次々と驚異的な進歩を与える、彼はそういった偉業を成し遂げた人物の像は一

つとして見つけることができませんでした。その一方で、善行をしているとは思えない人たちの像や、悪い噂を耳にしている人たちの像さえもそこに建てられていたのです。

「ふーん！」と彼は言いました。「わけが分からん」

彼はそのまま家に戻り、炉辺に腰を下ろして、その疑問を胸中から追い払おうとしました。

さて、彼の家はがらんとしていて、黒ずんだ通りがそれを取り巻いていましたが、彼にとってはかけがえのない場所でした。妻の手は仕事で硬くなり、彼女は実際の年齢よりも老けていましたが、彼にとっては尊い存在でした。子供たちは背丈が伸びず、じゅうぶんな食事を取っていないようでしたが、彼の目にはどの子も美しく見えました。この人物が何にも増して心底から願っていたのは、子供たちに教育を受けさせたいということでした。「私が」と彼は言いました、「学がないために道を誤ったことがあったとすれば、せめて子供たちが私よりも物が分かり、私と同じ轍^こを踏まないで欲しいのです。書物に蓄えられている楽しみや知識の産物を刈り取ることに私は難儀していますが、子供たちにはもっと楽にそれができるようになって欲しいのです」

しかしビッグウィッグ家は、この人物の子供たちに物を教えることがはたして正当なことなのかと、家族間で激しい言い争いを始めたのです。それこそが何よりも肝要で必要欠くべからざることであると言う者もいれば、それとは違ったことをしてやるのが何よりも肝要で必要欠くべからざることであると言う者もいました。ビッグウィッグ家は党派に分裂し、パンフレットを書いたり、集会を開いたり、訓令を発したり、演説をしたり、あらゆる論文を発表したり、さらにお互いを裁判所や教会裁判所に拘留し、罵り合い、殴り合い、理不尽な敵意から掴み合いの喧嘩まで始めていました。一方でこの人物は、夕方わが家の炉辺で短い眠りに就き、「無知」の悪魔が現れて子供たちを攫って行く夢を見ていました。彼は娘が鈍重でだらしない下働きの女に墮落して行き、息子が卑しい好色の道をだらだらと歩んで非道な罪を犯すようになるのを見ました。さらに幼児の目にほんのりと現れていた知性の光が疑い深く狡猾なものに変わって行くのを見て、彼はその子たちが白痴になってくれた方がましだと思いました。

「ますますわけが分からなくなった」と彼は言いました、「でも、これではいけないと私は抗議する！」

ふたたび気が静まると（彼は激情に駆られても、それはたいてい長続きはせず、優しい人柄だったからです）彼は日曜日や休日になると周辺の人たちの生活に目を向け、その生活がいかに単調で退屈なものであるか、その結果としていかに人が酒に溺れ、それが身の破滅につながっているかが分かりました。彼はビッグウィッグ家に訴えて言いました、「私たちはしががない労働者です。私は、どんな境遇にある労働者も——私の乏しい頭で考えているだけですが、あなた方よりももっと高邁な智恵を持つ人たちによって——心の回復と保養を必要とする状態に置かれているのではないかという^{おぼろ}な疑問を抱いています。そうした事態が続くなら、私たちがどんな状態に落ち込むかお分かりのはずです。さあ！ 私に無害の楽しみを与え、何かを私に教え、今の状態から逃れる道を示して下さい！」

しかし、この訴えを聞いたビッグウィッグ家は、喧々囂々たる状態に陥ってしまいました。少数の人たちが力ない声で、世の驚異、偉大な創造、時の大きな変化、自然の力、あるいは芸術の美を彼に教えてはどうか——つまり、彼がこれらのことを理解できる時期になれば——と
言い出したとき、凄まじい怒号や妄言、説教や哀願、だらだらとした言い抜けや嘆願、罵詈雑言
や悪態、議会の質疑に見られる甲高い空言と頼りない答弁——「そんなことはできない」と言
ったかと思うと「やりましょう」といった答え方——が次々とビッグウィッグ家の間でやり取
りされ、この哀れな人物はそれに度を失って、周りを狂ったように見つめていました。

「こんな騒動になるとは」と、彼は恐ろしさのあまり両手で耳を塞いで言いました、「私は自
分の身近な体験や、啓発されたいと思う人たち誰も思いを無心で訴えただけなのに。私には
分からないし、また分かってもらえない。こんな事態から何が生まれるのだろうか？」

彼がしばしばその疑問を自分に問いかけながら仕事に精を出しているとき、労働者の中で疫
病が蔓延し、数千人の規模で死者が出ているという噂が広がり始めました。彼は近所に出かけ
て自分の目で確認し、すぐにその噂が本当であることが分かりました。彼がずっと過ごしてき
た通りの狭苦しく薄汚い家々に、瀕死の人たちや亡くなった人たちが見境なく転がっていま
した。その境界の空気はそれまでも常に汚れて胸の悪くなるようなものでしたが、さらに新た
なウイルスがそこに漂っていたのです。健やかな人も脆弱な人も、年寄りも幼児も、父親も母親も、
全ての人たちが同じように病魔に侵されていました。

彼は逃げ出したくても、それができませんでした。彼は自分の居場所に留まり続け、大切な
人たちが息を引き取るのを見ていました。親切な牧師が彼を訪ねて、塞ぎ込んでいる彼の気持
ちを和らげるために少しでも祈ろうとしましたが、彼はそれに対してこう言いました、

「ああ、牧師さん、こんなむさ苦しい所に住むしかない私のところにいらっしゃって、どん
な役に立つというのです。この場所に暮らしていると、楽しみのために与えられるどんな感覚
も苦痛になり、私の限られた人生の一刻一刻が、私がかき苦しんでいる泥沼をさらにぬかる
ませることになるのです！ しかし、ほんの僅かでも天の光と空気を通して、見たことのない
天国を一瞥でもいいですから見させて下さい。清らかな水を与えて下さい。私が清潔になれる
ようにして下さい。私たちの元気を萎めさせ、あなた方がしばしば目にされるように私たちを
無感覚で冷淡な人間にするこの重苦しい空気と重苦しい生活に光を与えて下さい。私たちの中
で息を引き取っていく者の遺体を、このむさ苦しい部屋から心を込めて静かに運び出して下さ
い。かつてこの部屋は神聖なものでしたが、私たちはこうした恐ろしい変化にもうすっかり慣
れっこになって、それさえも感じなくなっているのです。ですから、牧師さま、私はあの方の
ことをぜひお聞きしたいのです——あなたさまがいちばんよくご存知なのですから——貧しい
者を深く思いやり、悲しみに暮れる全ての人を憐れんで下さったあの方のことを！」

悲しみに沈みながら彼がまた一人で仕事を始めたとき、喪服を着けた雇主がやって来て彼の
傍に佇みました。彼もまた痛切な悲しみを味わっていました。彼は若い妻——美しく優しい妻、
それに彼の唯一の子供まで亡くしていたのです。

「親方、さぞ辛いことでしょう——よく分かります——でも、元気を出して下さい。お力に

なればいいのですが」

雇主はそれに心から感謝しながらも、こう言いました、「ああ、哀れな労働者たち！ 君たちがもっと健康的でちゃんとした暮らしをしていたら、私はこうして妻を亡くし、一人取り残されるという悲運に見舞われることはなかっただろう」

「親方」と彼は頭を振って答えました、「少し分かりかけてきました。この度の災難と同じようにほとんどの災いが私たちから生まれるということ、そして私たちが彼方^{あなた}に見えるあの喧^{かまびすし}しい立派な一族と一緒にあって正しいことをしなければ、災いは私たちの家だけに留まらないということが。あの人たちが生きる手立てを講じてくれなければ、私たちは人並みの健康的な暮らしはできません。教えてもらえなければ、私たちには何も分かりません。ほんとうに楽しませてくれなくては、それなりに楽しむこともできません。彼らが人の集まる至る所に自分たちの像をやたらに建てている限り、私たちは自分たちの偶像を少しでも持たざるを得ません。いい加減な教育、人命の軽視、人間らしい楽しみを不自然に抑制し否定することから生まれる有害な結果は私たち労働者から生まれるものであり、私たちだけに留まることはないのです。それは広く蔓延していくでしょう。いつもそうですし、いつもそうでした——疫病とまったく変わりありません。やっとこれだけは分かったように思います」

しかし、雇主がさらに言いました、「ああ、哀れな労働者たち！ 君たちのことをめったに耳にすることは無いのに、耳に入るのは、君たちが何か面倒を起こす時だけだ！」

「親方」と彼は答えました、「私は氏^{うじ}も素性もない者で、何か面倒を起こさない限り、誰にも気かけられない存在です（また、あまり関わりたいとは思われたいでしょう）。しかし、それはけっして私から始まることではなく、けっして私で終わることもありません。死と同じように、それは私に降りかかり、私から広がって行くのです」

彼の言葉は至極もつともなもので、ビッグウィッグ家はそれを嗅ぎつけ、最近の災厄に恐れ戦いていたため、彼に組して正しいことを行おうとしました——ともかくも、上述した問題がさらなる疫病の防止に直接つながる限り、何とか知恵を出そうとしたのです。しかし、恐怖が静まると——それには時間はかかりませんでした——彼らの間でふたたび意見の食い違いが生じ、何一つ策を講じませんでした。そのため疫病が貧民の間でぶり返し、以前と同じように、まるで怨念を晴らすかのように上流の人たちまで広がって行き、論争に明け暮れる莫大な数の人たちの命を奪うことになりました。しかし彼らの誰一人として、ほんの少しは気づいていたとしても、自分がそれに責任があることを認めようとはしませんでした。

そして無名氏は昔から何一つ変わらないままに生き、何一つ変わらないまま一生を終えました。以上が、無名氏の話のあらましです。

彼には名前がなかったのか、と聞かれるでしょう。レギオン¹という名前だったかも知れません。名前はさしたる問題ではありません。レギオンと呼んだらどうでしょう。

あなた方がワーテルローの戦場²近くのベルギーの村に行かれたことがあれば、ひっそりとしたどこかの小さな教会で、忠実な戦友によって建てられた記念碑をご覧になったことがあると思います。その記念碑は、記念すべき日に義務の遂行中に戦死したA陸軍大佐、B陸軍少佐、

C, D, E 陸軍大尉、F, G, 陸軍中尉、H, I, J 歩兵少尉、七人の下士官、そして百三十人の下士官兵たちを記念するものです。無名氏の話は現世の名もない兵卒たちの話なのです。彼らは勝利に与ることもあるし、敗北を喫することもあります。彼らは十把じっばひとからげで名を残すだけです。私たちの中でどんなに誇り高い者でも、彼らの道を辿って塵ちりに帰るのです³。ああ！ 今年もクリスマスの炉辺で彼らのことを記念し、炉の火が消えた後も彼らのことを忘れないようにしましょう。

道」(V.v) という言葉注

1. 「マルコによる福音書」第五章九節参照。レギオンには、「大勢、多数」の意味がある。
2. 一八一五年六月十八日、ナポレオン一世がイギリスのウェリントン將軍指揮下の連合軍に大敗北を喫した地。
3. 「創世記」第三章十九節参照。『マクベス』には、マクベスの「死の塵に至る道」(V.v)という言葉がある。

七人の貧しい旅人たち

第一章

歴史あるロチェスターの町にて

厳密に言えば、旅人は六人だけでした。しかし、怠惰な旅人ではありましたが、私自身もそれに加わっていましたし、それに自分も負けず劣らず貧しいと思っていましたので、旅人の数を七人にしました。一風変わった古めかしい扉の上に何と記されていたでしょう？ それを読めば、私が言った言葉の意味はすぐにお分かりになります。

郷士リチャード・ウォッツの遺志により、
この慈善宿は、一五七九年八月二十二日、
六人の貧しい旅人のために
建てられたものである
彼らが身を騙かたる者、収税人でない限り、
一夜だけ無料で宿泊できる、
食事、接待は

それぞれ四ペンス

一年で最も善き日であるクリスマス・イヴのことですが、私はケント州の歴史ある小さなロチェスターの町で、一風変わった当の扉の前で佇み、その上に記された銘文を読んでいました。私は近くにある大聖堂の辺りをそぞろ歩いて、リチャード・ウォッツの墓石を目にしていたのですが、立派なリチャード・ウォッツ師の彫像がまるで船首像のようにその墓石から突き出しているようでした。私は墓守に心付けを与え、それでウォッツの慈善宿に行く道くらいは教えてもらえるだろうと思いました。それはすぐ近くにあり、分かりやすい道だったので、気がつくと、私は当の銘文が記された風変わりな古めかしい扉の前に立っていました。

「さて」と私はノッカーを見ながら自問しました、「私は身を騙る人間ではない。では、不正直であるとしたら！」

私は自らの良心に問いかけ、二、三人の美しい顔が思い浮かんだが、立派な(俗物的な)巨人のゴリアテ¹でも、親指トム²ごとき私が感じるほどの魅力をそれらに感じなかったかも知れないと思い、まあ自分は不正直ではあるまいという結論に達しました。そこで私は、その慈善宿が立派なリチャード・ウォッツ師によって私と多くの遺産受取人とに半々に遺贈された私の財産でもあるかのように、その宿に目をやり、後戻りして通りから私の遺産を見渡しました。

それは外側が白くきれいに塗られていて、古錆びて落ち着いた感じの建物で、すでに三度言及した風変わりな古風な扉(アーチ型の扉)、低くて横長の小さな格子窓があり、屋根には破風が三つ付いていました。ロチェスターの静かな本町通りには破風がそこかしこに見られ、古びた梁と板材には一風変わった顔が彫られていました。その通りには古くて風変わりな時計が変な具合に飾られていて、それが重厚な赤煉瓦造りの建物から突き出し、まるで「時」がそこで商売を営み、看板を掲げているかのようでした。実を言うと、時は古^{いにしえ}のローマ時代、サクソン時代、ノルマン時代、そしてさらにジョン王の時代³に至るまで、ロチェスターですでに活発に働いていて、ロチェスターにあるがっしりとした城——当時、その城が建てられて何百年経っていたかは定かに言うことはできませんが——は何世紀も風雨に晒されて、城壁の黒ずんだ隙間はすっかり損われて荒廃し、ミヤマガラスや小カラスによって目を剝り貫かれたように穴ぼこだらけでした。

私は自分の財産と考えた建物とその様子を見て、すっかり嬉しくなりました。ますます満足を覚えながら、なおもそれを見渡していたとき、開いたままの上階の格子窓の一つに、品のある健康そうな年配の婦人の姿を認めました。その婦人の目がもの問いたげに私の目を見て、「家をご覧になりたいのですか？」とはっきりと言っているようでしたので、私は大声で「はい、よろしければ」と答えました。すぐに古びた扉が開き、私は辞儀をして階段を二段下りて中に入りました。

「ここは」と右手の天井の低い部屋に私を案内しながら、落ち着いた年配の婦人が言いました、「旅行者が炉火の傍に座って、四ペンスほどのささやかな夕食を自炊して用意する部屋です」

「ああ！ では、旅人は接待を受けないのですか？」と私は聞きました。外の扉の上に記さ

れた言葉がまだ私の脳裏を駆け巡っていて、曲でも口ずさむように「食事、接待、それぞれ四ペンス」と心の中で繰り返していたからです。

「泊り客には暖炉の火を用意します」と婦人——私が認める所では、彼女はいくらお金を払ってもいいほど、とても親切な女性でした——が答えました。「それに、ここにある料理用具も使えます。掲示板に書かれているのは、ここでの規則です。旅行者たちは道の向こう側にある管理人からそれぞれ四ペンスで札を貰い——それがないと、この宿に泊れないので、まずその札を手に入れなければなりません——時には、それでベーコンの切り身を買うとか、また鱈にしんを買ったり、一ポンドのジャガイモなどを買ったりする者もいます。また時には、二、三人がそれぞれ四ペンスを出し合い、それなりの食事をしたりすることもあります。ですけれど、食料の値段がとても上がっている当世では、四ペンスで買える物はいくらありません」

「おっしゃる通りです」と私は言いました。私は奥の居心地の良さそうな暖炉を感心して眺め、窓の低い縦仕切りから見える通りや上の梁に目をやっていました。「とても快適ですね」

「不便ですよ」と恰幅のいい婦人が言いました。

私はその言葉を聞いて嬉しくなりました。その言葉が、リチャード・ウォッツ師の遺志を骨身惜しまず果たそうとするあっぱれな熱意を示していたからです。しかし、実際のところ、その部屋は用途にぴったりとした感じで整えられていたので、私は躍起になって彼女の苦情に反駁はんぱくしました。

「そんなことはありません、奥さん」と私は言いました、「きっと冬は暖かく、夏は涼しいことでしょう。心を和ませる家庭的な雰囲気があって、落ち着いてくつろげる感じがします。炉辺はとても居心地が良く、冬の夜、そのちらちらとした明りが通りに漏れると、それだけでロチェスターの住民の誰もが暖かい気持ちになることでしょう。六人の貧しい旅人の便宜からしても——」

「不便と言ったのは、その人たちのことではないのです」と恰幅のいい婦人が言いました。

「私や私の娘にとって不便なのです。夜、私たちが座ってくつろげる部屋が他にないからです」

たしかにそうでしたが、入口の反対側に同じような大きさの風変わりな部屋が別にあって、両方の部屋の扉が開いたままになっていたのです、私はその部屋に行って、この部屋は何に使うのですか、と聞きました。

「これは」と恰幅のいい婦人が答えました、「会議室です。紳士方が来られた時に、ここで会議をなさるのです」

はてさて。私は通りから数えたとき、一階にあるこれらの部屋の他に、二階に六つの窓がありましたので、部屋と宿泊者のことで頭がこんがらがり、こう尋ねました、「では、六人の貧しい旅人は二階で眠るのですか？」

私の新しい友人は頭を横に振りしました。「その人たちは」と彼女が答えました、「裏手にある二棟の小さな離れ家で休みます。そこにはこの慈善宿が建てられてからずっと、その人たちのベッドが置かれているのです。現状では、その家が私にはとても不便ですので、紳士方が裏庭の一部を削って、夜寝る前に旅人たちがくつろげる細長い部屋を造ることにしています」

「では、六人の貧しい旅行者は」と私は言いました、「母屋から完全に閉め出されることになるんですね？」

「完全に閉め出されます」と恰幅のいい婦人が、満足そうに両手を撫でながら相槌を打ちました。「その方が誰にとっても好ましく、ずっと便利になります」

私は、大聖堂でリチャード・ウォッツ師の彫像が墓石から突き出しているのを見ていささか驚いたのですが、その像がいつか荒天の夜に、今度は本町通りを越えてこの宿に現れ、騒動を起こすのではないかと思いはじめました。

しかしながら、私はその思いを胸に収め、恰幅のいい婦人の後について裏の小さな離れ家に向かいました。それらは旅館の中庭にある歩廊のようなこじんまりとした建物で、とても清潔な感じでした。私がそれに目をやっていると、婦人が、決められた数の貧しい旅人たちが年から年中やって来て、常にベッドは塞がっています、と教えてくれました。そのことで私があれこれと尋ね、彼女がそれに答えてから、「お偉方」の威厳を見せつける会議室に戻りました。そこで彼女は、窓際に掛かっている印刷した宿の説明書きを私に見せました。私はそれを読んで、慈善協会の維持のためにリチャード・ウォッツ師から遺贈された地所の大部分が、彼が死亡した時期にはただの沼地であったが、やがてそれが埋め立てられ、建物が建てられ、その価値が大いに増したのではないかと思いました。私はまた、一年の歳入の三十分の一ほどが、現在では扉の上の銘刻に謳われている目的に使われていることも分かりました。残りの収入は、六人の「貧しい旅行者」の重要性に配慮して、大法官庁、訴訟費、集金、管財、郵便料金、その他の運営費用に惜しみなく使われていました。手短かに言えば、古く懐かしいイングランドのこのような施設は、アメリカの話にある丸々と太った牡蠣と同様、全部を飲み込む(理解する)のがとても厄介であるあるという、さして目新しくもないことが分かっただけでした。

「それで、奥さん」と私は、ほんやりとしていた自分の顔が、ある事を思いついて晴々としてくるのを感じながら言いました、「その旅行者たちの誰にも逢えないのでしょうか？」

「まあ！」と彼女は不審そうに答えました、「逢えません！」

「例えば、今夜！」と私は言いました。

「まあ！」と彼女はさらにきっぱりとした口調で答えました、「だめです。今までそんなことを言った人はいませんでしたし、誰一人その人たちに逢ったことはありません」

いったん心に決めると、私は容易には引き下がらない性分なので、善良な婦人に矢継ぎ早に訴えました。今日はクリスマスではありませんか、一年に一度のことです——残念なことに一度きりです。もし、一年中クリスマスであったら、この世は今とはまったく違ったものになるでしょう——私は旅行者たちに夕食と熱い酒をほどほどに振舞いたいと思っています、もし宴を開くことを許されるなら、相手が知的な人であれ、謹厳な人であれ、私は一緒にくつろいで楽しく時を過ごすことができます、一言で言えば、私は自分が場を棄てて楽しく過ごすことができますし、場が白けても他の人たちを楽しませることができると誰もが認めてくれています、とは言っても私は徽章や勲章で身を飾ってはならず、どんな宗派の修道士、信奉者、使徒、聖人、預言者でもありません、とまくし立てたのです。ついに私は彼女を説き伏せることができ、

胸がわくわくしてきました。その夜、九時に、湯気を立てる七面鳥と一塊のローストビーフを食卓に載せて用意し、リチャード・ウォッツ師のその場限りの不肖の弟子である私が、六人の貧しい旅人にクリスマスの晩餐を振舞う主人役を務めることになりました。

私は旅館に戻って、七面鳥とローストビーフを届けるのに必要な指示を与え、その日はずっと貧しい旅人たちのことで頭がいっぱいになり、何をしても上の空でした。風が窓に激しく打ちつけると——その日は寒く、まるで一年が発作を起こして死にかかっているかのように、陰鬱な曇り混じりの突風が吹くかと思うと、その合間に狂ったように明りが射していました——私は旅人たちがさまざまな凍てつく道を通って休息場所に近づいているのを心に描き、彼らが自分たちを待ち受けている晩餐のことなど夢にも思っていないのではないかと想像すると、嬉しくなってきました。私は彼らの姿を心に描き、それぞれの特徴を少し誇張して楽しんでいました。足ずれに苦しむ者、疲れ果てた者、荷物や包みを運ぶ者、道標や里程標に近寄って曲がった杖に寄りかかり、そこに記されている数字を悲しそうに見つめる者、道に迷う者、夜に野宿を強いられ凍え死にするのではないかという不安で五感を戦かせている者——私はこんな風に、彼らの像を勝手に造り上げていたのです。私は帽子を手に旅館を出て古びた城の天辺に上り、メドウェイ川に向かってなだらかに傾斜している、風の吹きすさぶ丘陵の向こうに、私が持て成す何人かの旅人の姿が遥かに見えるのではないかと、信じるでもなく目を向けました。夜の帳が下り、目に見えない尖塔から大聖堂の鐘——直前に見た時には、それは霧氷に包まれていました——が五、六、七時と時を告げるのが聞こえてくると、私は旅行者のことで頭がいっぱいになり、食事が喉を通らず、暖炉で赤々と燃える石炭の炎の中に、相変わらず彼らの姿がしきりに浮かんでくるのでした。私は、彼らがすでに到着して、札を手に入れて宿に入っているだろうと思いました——と同時に、ひょっとしたら旅行者の幾人かが遅れて到着し、閉め出されているのではないかと思い、私の喜びも掻き消されてしまいました。

大聖堂の鐘が八時を告げると、七面鳥やローストビーフの美味しそうな匂いが、大聖堂に隣接する私の寝室の窓に立ち上ってくるのを嗅ぐことができました。その窓から下を見ると、台所の明りが中庭を照らしていて、城壁の大きな残骸の一部が赤々と浮かび上がっていました。そろそろ宴の酒を造る時間になっていましたので、私は取り寄せていた材料（その割合や調合の仕方は、誰も知らない私の唯一の秘密なので、ここで披露することはできません）で、素晴らしいポンチ酒を造りました。それを鉢には入れませんでした。棚に載せておこなら別ですが、鉢では中身が冷めたり零れたりするからです。私はポンチを陶器製の茶色の水差しに入れ、いっぱいになるとそれに祖布をそっと被せました。九時の鐘が鳴りかけると、私は茶色の逸品を自分で抱えてウォッツの慈善宿に向かいました。私は給仕のトムをあくまでも信頼していましたが、人の心には他人に推し量れない琴線があって、私が自分で造るポンチはそうした琴線に触れるもので、運ぶのを人に任せられなかったのです。

旅人たちは勢揃いしていて、テーブルクロスが広げられ、ベンが薪をどっさりと持ち込んでいて、食後に火掻き棒でちょっと触ればどっと燃え上がるように巧みに火の上にそれを積み上

げていました。炉格子に囲われた赤く燃える暖炉の隅に私の逸品を置くと、それは靈妙な蟋蟀こおろぎながら、すぐに快い音色を奏で始め、同時に、葡萄がたわわに実る葡萄園の香り、芳しい森の香り、さらに柑橘類かんきつの実る果樹園のような香りが漂ってきました——そうです、私は自分の大切なポンチを安全でさらに引き立つ場所に置くと、私の客全員と握手をしながら自己紹介し、心からの歓迎の意を伝えました。

宴にいた顔ぶれを述べますと、まず私自身、それから実に上品な人物がいて、彼は右腕を包帯で吊っていて、何か清らかで快い材木の香りを漂わせていましたので、私は彼が造船の仕事に関わっているのではないかと推察しました。三人目は幼い船乗りで、まだほんの子供に過ぎず、ふさふさとした暗褐色の髪、そして深みのある女らしい目をしていました。四人目は擦り切れた黒色のスーツを着たうらぶれた人物で、ひややかで疑り深そうな表情をしていて、いかにも窮乏している様子でした。チョッキのボタンが欠けている所は赤い紐で繕っていて、胸の内ポケットからぼろぼろになった紙の束が突き出していました。五人目は、生まれは外国でしたがちゃんと英語を話す愛想の良い人物で、帽子の帯にパイプを挟み、屈託のない率直な口調で、自分はジュネーヴから来た時計職人で、新しい国々を見ながら職人として働き、ほとんど徒歩で大陸中を旅している、と聞かれるでもなく進んで話してくれました——おそらく(そんな気がしたのですが)、時計を一つ二つ密売したこともあるのでしょう。六人目は小柄な未亡人で、かつては美しい容貌をしていて、まだ若かったのですが、何か大きな不幸に見舞われてその美貌がそこなわれ、物腰はひどくおずおずとしていて、寂しそうで、何かに怯えている感じでした。最後の七人目は、私が子供の頃にはよく見かけましたが、今ではほとんど姿を消してしまった旅人——多量の小冊子や雑誌の分冊を売り歩く行商人——で、十二ヶ月で売れるよりも多くの詩を一晩で暗唱してみせると言い触らしていました。

以上、食卓に就いた順に従って旅人たちを紹介しました。私が主人席に就き、恰幅のいい婦人が私の真向かいに座りました。席に就いてから皆は待ちぼうけを食うことはありませんでした。料理が以下の順で運ばれ、私と一緒に到着したからです。

水差しを運ぶ私

ビールを運ぶベン

熱い皿を並べる気の利かないボーイ。熱い皿を並べる

気の利かないボーイ

七面鳥

その場で温めるソースを運ぶ女

ビーフ

野菜や何やかやを入れた盆を頭に

載せた男

ホテルから志願してやって来た馬丁、にやにや笑って

何一つ手伝おうとしない

私たちが^{ほうき}帚星さながら本町通りを行進していたとき、料理の香りが後に尾を曳き、人々は驚いて立ち止まり、その匂いを嗅いでいました。私たちは前もって旅館の中庭に白目の若者を残していました。彼は貸し馬車関係の仕事に携わっていて、ベンが常にポケットに入れている鉄道の呼子の音を熟知していましたので、呼子の音を聞いたら、間髪を入れず台所に飛び込み、熱々のプラム・プディングとミンスパイを引っ掴んでウォッツの慈善宿に急行するよう、ベンから指示されていました。そこに着くと（彼はさらに指示を受けていて）、その料理をソースを温める女に渡し、彼女に青く燃焼しているブランデーを備えてやる、という算段になっていました。

こうした手筈がきわめて正確に、そしてすべて決められた時間通りに実行されました。あれほど素晴らしい七面鳥、あれほど素晴らしいビーフ、あれほどたっぷりと振舞われたソースや肉汁を見たことはありません。そして私が招いた旅人たちは、目の前に置かれた料理を残らず平らげました。皿やフォークやナイフのがちゃがちゃ鳴る音を聞いて彼らの風雪に晒されて^{こわ}強ばった顔が和らぎ、暖炉の火や暖かい食事で^{ほく}解れていくのを見ると、心から嬉しくなりました。その一方で、部屋の片隅に掛けられている彼らの帽子や縁なし帽や肩掛け、それに別の隅に置かれている先端が磨り減った三、四本の杖が、寒々とした外気と心地よい室内とを黄金の鎖で結びつけているようでした。

食事が終わり、私の褐色の逸品が食卓の上に置かれると、皆がこぞって「隅にお座り下さい」と私に求めました。その言葉を聞くと、ほんとうに快い気持ちになり、私の友人たちがどれほど暖炉の火を大切に思っているかが分かりました——私がジャック・ホーナー⁴と暖炉の火を結びつけた日から、部屋の隅をこれほど素晴らしいものと思ったことはありません。しかし私がそれを断ったため、いわば全ての宴会の楽器にちょっと触れるだけで完璧な音色を奏でることのできるベンがテーブルを引き下げ、私の椅子を中央に寄せ、私の席の左右を空けて食卓で並んでいた順に火を囲むよう、旅人たちに指示しました。彼はすでに穏やかな形ですが気の利かないボーイたちの横っ面を張り、彼らはほとんど気づかれぬまま部屋から叩き出されていました。そして彼は、ソースを用意した女を小競り合いのあげくさっさと本町通りに追い出し、自らも部屋を出て扉をそっと閉めました。

それが火掻き棒で薪を燃え上がらせるきっかけでした。私は魔除けのお守りでもあるかのように薪を三度軽く突くと、炎が眩いほどにぱっと燃え上がり、煙突付近で戯れるのを止め——田舎踊りよろしく煙突の中を駆け上がり、二度と下で戯れることはありませんでした。その間、ランプの明りを^{がんしょく}顔色なからしめる炉の赤々と燃える光によって、私は皆のグラスに私のポンチ酒を満たし、旅人たちに「クリスマスおめでとう！」と言って祝杯をあげました——皆さん、クリスマス・イヴに感謝しましょう。貧しい旅人とも言える羊飼いたちが、「地の上では、^み御心にかなう人々に平和があるように！」⁵と天使たちが歌うのを聞いた晩です。

乾杯にあたって互いに手を取り合ったら、と最初に思ったのが誰であるか、あるいは真っ先にそうしたのが誰であるか、私には分かりませんが、ともあれ、私たちは手を取り合いました。

それから私たちは、リチャード・ウォッツ師を祈念して乾杯しました。彼の霊がこの屋根の下で、私たちに劣らぬ歓待をこれまでずっと受けていたとすれば、実に喜ばしいことです。

打ち明け話が人を魅惑する絶好の機会が訪れました。「私たちの生涯は、皆さん」と私は言いました、「分かり易いこともあるし、分かり難いこともあります——概して分かり難いものです。しかし話してしまうと、以前よりもはっきりとした形で物が見えてくるでしょう。少なくとも私は今夜、事実と想像がいっしょくたになって、何が事実で何が虚構なのか判然としない状態なのです。こうして一緒に座ったまま、退屈しのぎに一つ話を聞いていただけますか？」

旅人たちは、ぜひ話して下さい、とこぞって答えました。大した話ではありませんでしたが、言い出したからには退くわけにもいきません。で、私の褐色の逸品から渦を巻いて柱状に立ち上る湯気——誓ってもいいと思いますが、その湯気を通して、常よりも落ち着いたリチャード・ウォッツ師の彫像を見ることができました——をしばらく見つめてから、私は勢い込んで話し始めました。

第二章

リチャード・ダブルディックの話

一七九九年のことですが、私の親戚の者が足を引きずりながら徒歩でこのチャタムの町にやって来ました。この町と言いましたのは、ここにおられるどなたかはロチェスターがどこまで、チャタムがどこから始まるのか正確に分かっておられると思いますが、私にはとてもそれが分からないからです。その人物は貧しい旅行者で、ポケットに一銭も持っていませんでした。彼はまさにこの部屋の暖炉の傍に座り、ある夜ここにおられるどなたかが使われているはずのベッドで一夜を明かしたと思われます。

私の友人は騎兵連隊に入隊するためにチャタムにやって来ました。連隊が彼を受け入れてくれればということとして、もしそれが駄目なら、徽章を帽子に付けてくれる伍長とか軍曹からシリング賞⁶を貰って兵士になるつもりだったのです。彼の願いは射殺されることでしたが、歩く面倒をするよりは馬に乗って殺される方がましだと思っていたのです。

彼の洗礼名はリチャードでしたが、世間ではディックとして知られていました。彼は放浪しているうちにどこかで苗字を落としてしまい、どこかで拾ったのがダブルディックという名でした。彼はリチャード・ダブルディックとして名が通っていて、二十二歳で、背丈は五フィート十インチ、生まれはエクスマスでしたが、それまでその近くには行ったことがありませんでした。彼がぼろぼろの靴を履いた足を引きずりながら橋を越えた時期、チャタムには騎兵隊が駐屯していませんでしたので、彼は正規軍の連隊に入隊し、これ幸いに酒に溺れ、何もかも忘れてしまいました。

この親戚が道を誤って、身を持ち崩したことを話さなければなりません。彼は心が狂ったと

いうのではなく、殻に閉じこもってしまったのです。彼は、気立ての良い美しい娘と婚約していて、彼女が思う以上——いや、彼自身が思う以上に彼女を愛していました。しかし、不幸にも、彼は彼女が拒む原因を作ってしまう、彼女は厳粛な口調でこう言ったのです、「リチャード、私はけっして他の男性とは結婚しません。私はメアリ・マーシャルの思いは別として、あなたのために独身で過ごします」——彼女の名前はメアリ・マーシャルでした——「もうこれからは、私からあなたにけっして言葉をかけることはしません、別れましょう！ 神さまがあなたを赦されますように！」この言葉で彼は打ちのめされ、チャタムに足を向けたのでした。それから彼は撃ち殺される覚悟を決めて、リチャード・ダブルディック二等兵になったのでした。

一七九九年、チャタムの営舎でリチャード・ダブルディック二等兵ほど荒んで投げ遣りな兵士はいませんでした。彼は連隊にいる屑のような兵士と交遊し、日がな一日酒に酔っているという為^{ていたらく}身で、絶えず懲罰を受けていました。全ての営舎の兵隊たちは、リチャード・ダブルディック二等兵がいずれ鞭打ちの刑に処せられるものと確信していました。

さて、リチャード・ダブルディックの中隊の大尉は彼よりも五歳も違わない若い将校で、彼の目はリチャード・ダブルディック二等兵の心を揺り動かす不思議な表情をしていました。それは、きらきらと輝く、黒くて美しい瞳——にこやかな目とよく言われるものですが、真面目になると厳しいというよりも、冷静な感じを与えるものでした。しかしその目は、自らが狭めてしまった世界でただ一つ、リチャード・ダブルディック二等兵が黙殺できないものでした。彼は、不快な噂をされても懲罰を受けても平然としていて、他の何事に対しても誰に対しても横柄な態度で応じていたにもかかわらず、その目が彼を一瞬見つめただけで、羞恥心を覚えるのでした。彼は通りでトーントン大尉に逢っても、他の将校に対するような敬礼さえできませんでした。大尉が彼を見つめているかもしれないと思うだけで、叱責された気がして狼狽し——どぎまぎするのでした。いちばん気まずい時に大尉に出逢うと、彼はあのきらきらと光る黒くて美しい瞳に見つめられるよりも、そのまま引き返して遠回りしようと思ったほどでした。

ある日、リチャード・ダブルディック二等兵が四十八時間閉じ込められていた営倉——彼はほとんどの時間をそこで過ごしていました——を出たとき、彼はトーントン大尉の営舎に行くよう命じられました。それに従えば、営倉から出たばかりの不潔で厭な臭いを発する自分の身体を大尉の前に晒さなければならず、彼は何とかしてそれを避けたい気持ちでした。しかし彼は、命令に従わないほど錯乱しているわけではなかったので、閲兵場が見渡せる、将校たちの宿舎のある高台に上がって行きました。その途中で、営倉の装飾品でもあった一本の藁を手中で捻ったり、折ったりしていました。

「入りたまえ！」と、彼が拳で扉をノックすると、大尉が大声で言いました。リチャード・ダブルディック二等兵が帽子を取り、一歩進み出たとき、彼は例のきらきらとした黒い瞳から発する光に晒されているような感じに捉われました。

一瞬、二人は黙って顔を見合わせました。リチャード・ダブルディック二等兵は口に銜えていた藁を折り曲げて器官まで飲み込み、喉を詰まらせていました。

「ダブルディック」と大尉が言いました、「君は自分がどんな道を歩んでいるのか、分かって

いるのかね？」

「破滅の道ですか？」とダブルディックは口ごもりながら言いました。

「その通りだ」と大尉が言いました、「それも、まっしぐらにな」

リチャード・ダブルディック二等兵は営倉の藁を口の中で捻くり、仰せの通りですと惨めな様子で黙礼した。

「ダブルディック」と大尉が言いました。「十七歳の時に英国軍隊に入隊して以来、私は多くの有為の青年が君と同じ道を辿るのを見て、心を痛めてきた。しかし、君がこの連隊に入ってからずっと君を見てきたが、性懲りもなく破廉恥な道を歩もうとする兵士の中でも、君ほど私の心を痛めた者はいない」

リチャード・ダブルディック二等兵が見ていた床が震がかかったようになり、さらに大尉の朝食用のテーブルの脚が、水を通して見るように歪んできました。

「私はただの二等兵に過ぎません」と彼は言いました、「私のような哀れな人でなしがどうなるろうと、大したことではありません」

「君は」と大尉は怒りを含んだ厳粛な口調で言いました、「教育もあるし、立派な長所もある。君がそんなことを言うのなら、つまり、本心から言っているのであれば、君は私が思っていた以上に墮落した男だ。それがどんなに低劣なことであるか、自分で篤と考えて見ろ。私が君のみっともなさをどう思っているか、それをどう見ているか、分かっているはずだ」

「私はすぐに射殺されることを願っております」とリチャード・ダブルディック二等兵が言いました、「そうなれば、連隊や社会にとって厄介払いになるでしょう」

テーブルの脚がますます歪んで見えてきました。床に目を落としていたダブルディックがはっきり見ようとして目を上げると、その視線の先に強烈な力を彼に及ぼすあの目がありました。彼は目に手を翳しましたが、懲罰用の上着の胸が見る見る膨らんで、今にもはち切れそうになりました」

「ダブルディック、私は」と若い大尉が言いました、「母親への贈物としてテーブルに五千ギニー積み上げられるよりも、君が褒められるのを見る方が、ずっと嬉しい。母親は健在なのか？」

「幸いなことに、亡くなりました」

「君に対する称賛が」と大尉が言った、「連隊中の、軍隊中の、そして国中の人たちに口伝えに広まっていくなら、君は、母親が生きていて、『それは私の息子です！』と喜んで誇らしげに言うのを聞きたいだろう」

「勘弁して下さい」とダブルディックは言いました。「母は私の良い評判など聞いたはずもありませんし、私の母親になったことに喜びや誇りを抱くことなどいっさいなかったでしょう。私に対する愛情や哀れみを持つことはあったかも知れませんが、常に持っていてくれたと思います。ですが、私の評判は——ご勘弁下さい。私は落ちぶれ果てたならず者で、生かすも殺すもあなた次第です！」そう言って、彼は壁に顔を向け、哀願するように片手を前に伸ばしました。

「いいかね——」と大尉が口を開きました。

「ありがとうございます！」と、啜り泣きながらリチャード・ダブルディックが言いました。「君は運命の瀬戸際にいる。君がこのまま少しでも今の道を歩むなら、どんなことになるかわかっているだろう。その後君がどうなるか、君が思う以上に私には分かる。君はもう万事休すだ。義憤の涙を流していた人も、君の救い難い姿を見れば、もう辛抱の緒が切れるだろう」

「まったく仰せの通りです」と、リチャード・ダブルディック二等兵が震えを帯びた低い声で言いました。

「だが、どんな状態に置かれた人間でも、その気になれば義務は果たせる」と若い大尉が言いました。「数奇な運命に^{もてあそ}ばれて他の人の敬意を得られないとしても、義務を果たすことで自分自身に対する敬意だけは持つことができるのだ。たった今、君は自分のことをしがらない兵卒で、哀れな人でなしと言ったが、そうした人間だからこそ、この波乱に満ちた時勢に、同情を寄せる数知れない証人の前で常に自らの義務を果たすことができるのだ。連隊中で、軍隊中で、そして国中で褒め称えられるようなことができないとでも思っているのかね？過去の償いができるうちに、生き方を変えることだ。やってみなさい」

「やります！ 一人だけ証人を求めます」と、リチャードは胸が張り裂けんばかりの思いで言いました。

「了解した。君を見守る忠実な証人となってあげよう」

私はリチャード・ダブルディック二等兵からじかに聞いたのですが、その時彼は跪き、将校の手に唇を当て、別人となって、あのきらきらした黒い瞳から発する光に別れを告げました。

その年、一七九九年のことですが、フランス軍がエジプト、イタリア、ドイツに限らず、至る所に侵攻していました。ナポレオン・ボナパルトもまたインドのイギリス軍に対して戦いを起こし、迫り来る大きな動乱の兆候をほとんど全ての人感じていました。イギリスがオーストリアと同盟を結んだ、まさにその翌年、トーントン大尉の連隊がインドで戦っていました。そして、その連隊で——いや、全ての戦線で——リチャード・ダブルディック伍長ほど立派な働きをした下士官はいませんでした。

一八〇一年、インドに駐留していた陸軍がエジプト沿岸に進攻しました。短期間の講和が布告された翌年、連隊はインドに呼び戻されました。兵士たちの間で周知のことでしたが、きらきらと輝く黒い瞳をしたトーントン大佐がどこで指揮を執っていても、その傍らに、岩のように揺らぐことなく、太陽のように忠実で、そして軍神のように勇敢な軍曹、あの^{かく}赫々とした名声を^{ほしいまま}縦にしているリチャード・ダブルディック軍曹が寄り添っているのが見られるのでした。

一八〇五年は、トラファルガーの海戦に勝利した重要な年でしたが、さらに、インドで苦戦を強いられた年でもありました。その年、ある特務曹長によって数々の奇跡が生まれました。彼は密集した軍勢を単独で切り抜け、心臓を射抜かれた哀れな少年の手から奪い取られていた連隊旗を奪い返し、さらに深傷を負って馬から落下し、^{ひづめ}蹄やサーベルで揉みくちやにされていた大尉を救出したのです——このように、勇敢な特務曹長によって数々の奇跡が行われたことから、彼は自分が奪還した連隊旗の旗手に特別に任じられ、リチャード・ダブルディックは列兵の地位から歩兵少尉に昇進していました。

戦闘でことごとく壊滅的な敗北を喫しながらも、勇猛果敢な兵士たち——名声を求めて由緒ある連隊に入隊し、銃に撃たれてぼろぼろになりながらもリチャード・ダブルディック少尉によって守られ、それが全ての兵士の胸を鼓舞したのです——が次々と戦線に加わり、この連隊は半島戦争⁷を勝ち抜いて、一八一二年、バダホス⁸を包囲したのです。それが幾度となくイギリス軍の兵士たちの間で喝采を博し、兵士たちの武勇を称える力強い同胞の声を聞くだけで、彼らの目に涙が浮かぶのです。少年鼓手さえもが皆その話を知っていましたし、きらきらと輝く黒い瞳をしたトーン少佐と、彼に献身的に仕えるリチャード・ダブルディック歩兵少尉が連れ立っているのを見ると、イギリス陸軍のどんなに勇猛な兵士でも、彼らに付き従いたいという衝動に駆られるのです。

ある日、バダホスで——いっせいに砲火が浴びせられるといった状態ではなく、塹壕^{ざんごう}に取り残されたイギリス軍の兵士たちへの激しい攻撃にイギリス軍が反撃していたとき——踏み止まって攻撃していたフランスの歩兵部隊を背に、両軍の将校が急遽前方に進み出て、向かい合う形になりました。敵方の将校が部隊の先頭に立って軍を鼓舞していました——彼は三十五歳くらいの、凛々しく堂々とした物腰をした将校で、ダブルディックはちらっと彼に目をやっただけで、しっかりとその姿を観察していました。彼の目に焼きついたのは、その将校が軍刀を振りかざし、熱く興奮した叫び声で部下たちを鼓舞し、彼らが合図に従って発砲し、トーン少佐が倒れるところでした。

十分以上が経過し、ダブルディックは泥土に敷いた外套の上に誰よりも大切な友を寝かせていた場所に戻って来ました。トーン少佐の軍服の胸の部分が開けていて、シャツの三箇所^{はらばら}に小さな血痕が付いていました。

「ダブルディック」と彼が言いました、「もう駄目だ」

「お願いします、そんなことは言わないで下さい！」とリチャードは言って、傍に跪き、抱き上げようとして腕を少佐の首に回しました。「トーン！ 私の保護者、私の守護天使、私の証人！ あなたは誰よりも心優しく、真心のある、大切な人です！ トーン！ お願いします！」

きらきらと輝く黒い瞳——青ざめた顔の中で、その黒さはいっそう深みを増していました——が彼に微笑みかけました。そして、十三年前に彼が接吻した手が彼の胸に優しく置かれました。

「母に手紙を書いてくれ。君はまた祖国の土を踏むだろう。私たちが友情を築いた経緯を母に伝えてくれ。それが母を慰め、私の慰めにもなる」

彼はそれ以上は口を開かず、一瞬、風に吹かれている自分の髪を力なく指差しました。歩兵少尉はその意図を察しました。少佐はそれを見てもう一度微笑み、休息を求めるときのよう支えられている腕の上で顔の向きを変え、彼が更生させた少尉の胸に手を当てたまま息を引き取りました。

その悲しい日、リチャード・ダブルディック歩兵少尉を見た誰もが涙に咽^{むせ}んでいました。彼は大切な友の遺体を戦場に埋葬し、一人寂しく取り残されてしまいました。軍務は別として、

彼にはこの世での関心事は二つしかなかったようです——トーントンの母親に渡す遺髪を入れた小さな包みを失わないようにすること、そして部下を指揮してその銃砲によってトーントンを倒したフランス人の将校に出くわすことでした。わがイギリス軍の間で、彼とフランスの将校がもう一度相對するようなことがあればフランスは悲しみに暮れるであろうと、誰もが噂するようになりました。

戦争は続きましたが——その間ずっと、片やフランス将校の生き写しの姿と、片や生身の将校が相まみえていました——トゥルーズの戦いでやっと決着を見ました。祖国に送られた報告書には、「リチャード・ダブルディック中尉； 重傷、生命に別状なし」と記されていました。

一八一四年の盛夏、日焼けしたリチャード・ダブルディック中尉が傷病兵として母国イギリスに帰還しました。三十七歳になっていました。彼は胸の辺りに大切に保管して、遺髪を持ち帰っていました。あの日以来、彼は数多くのフランス人の将校の姿を目にし、また昼間の惨い戦いが終わった後、幾晩も角灯を手に部下と負傷兵を探し、負傷して倒れているフランス人の将校たちを救ってきましたが、心に描いていた像と現実の人物が一致することはありませんでした。

彼は身体が衰弱して痛みに苦しんでいましたが、一刻を惜しんでトーントンの母親が住んでいるサマセットシャーのフルームに出向きました。その夜、自ずと心に浮かんできたのは、「彼は一人っ子で、母親は未亡人なのだ」という悲しみを誘う優しい言葉でした。

日曜日の夕方で、夫人は庭を見晴らす静かな部屋の窓の傍に座って聖書を読んでいました。彼女は震えを帯びた声で、彼が私に話したことのあるあの同じ聖書の箇所を読んでいて、「若者よ、さあ起きなさい！」⁹という言葉が聞こえました。

彼は窓際を通り過ぎなければならず、あのきらきら光る黒い瞳が不面目な状態にあった時の彼を見ているような気がしました。彼女は暗黙のうちに彼であることが分かり、さっと玄関に出て、彼の首を抱きました。

「息子さんのお陰で私は破滅から救われ、人間らしい心を取り戻し、汚名と恥辱から免れることができました。ああ、神のみ恵みが永遠に彼の上にありますように！ きっとその祝福に与っておられます！」

「きっとそうです！」と夫人が答えました、「あの子が天国にいることは分かっています！」それから彼女は痛切な声で言いました、「でも、ああ、私の愛しい子、愛しい子！」

リチャード・ダブルディック二等兵がチャタムで兵役に就いた時から、二等兵、伍長、軍曹、特務曹長、歩兵少尉、あるいは中尉へと昇進した彼は、自分の正しい名前やメアリ・マーシャルの名前を洩らしたり、あるいは彼の生涯の話を、自らを正しい道に導いてくれた人物以外の耳に語ったりすることはいっさいありませんでした。彼の活動の舞台はそこで幕を閉じたのでした。彼は罪滅ぼしのために強く心に期していることがありました。彼は、人知れず生きること、自らの昔の罪障を長い間蔽っていた平安を二度と乱さないこと、自分がこの世を去ってから自分が努力と苦しみを重ね、けっして自分の過去を忘れず生きてきたことを世間に分かってもらえればいい、そして、世間が彼を許し、彼の言葉を信じてくれるなら、——そう、まだ時

間はある、まだ間に合う！——と思っていたのです。

しかしその晩、彼は「母親に私たちが友達になった経緯を話さないといけない。そうすれば、母親も私と同じように心が慰められるだろう」という二年間心に抱いていた言葉が浮かんできて、包み隠すことなく彼女に打ち明けました。彼は少しずつ、大人になってもう一度母親ができたような気持ちになり、息子を失った母親も新たに息子ができたような気持ちに少しずつなっていました。彼がイギリスに滞在している間、彼が見ず知らずの人間として痛切な気持ちでゆっくりと忍び込むようにして入った庭は、彼の家庭への境界になりました。春になって彼が連隊に復帰できるようになると、女性の祝福を受けて歴史ある軍旗に向かうのは初めてのことだと思ひながら、彼はその庭を後にしました。

彼はその軍旗——ぼろぼろになり、傷つき、穴だらけになっていて、旗の体を失っていました——を掲げる連隊の指揮を執って、カトルブラ¹⁰やレンニ¹¹へと進軍しました。湿っぽい六月の午後、霧と小糠雨でぼんやりとかすんで見える兵士たちが荘厳な静寂の中で佇むウォータールーの戦場で、彼はその軍旗の傍らに立っていました。その時まで、彼の心から離れることのないあのフランス人の将校の姿が現実に現れることはありませんでした。

この名だたる連隊は、戦争の初段階から行動を起こし、その波乱万丈の年に初めて進軍を阻止され、彼が倒れるのが目撃されました。しかし連隊は仇を討つため堂々と進軍し、リチャード・ダブルディック中尉のみならず、意識ある者全てを救出しました。

ぬかるんだ穴ぼこ、雨による水溜り、かつては道であったが大砲で激しい砲撃を受けてずたずたにされた深い溝のようになった道を、思い荷馬車や脚を引きずる兵士や馬、負傷兵を運ぶため残った車輪でもがくように進むあらゆる車が、血と泥に塗れ人間とは思えないような瀕死の者や死体の間を——兵士の呻き声や穏やかな日常から連れ出され、道端に転がっている敗残兵を見ていたたまれずに甲高い嘶き声を上げ、それ以上苦しい旅を続けようとしぬ馬たちにお構いなく——揺れながら進み、その中に、身体感覚は失われても、まだ息のある者——その称賛の声がイギリス中に鳴り響いていたリチャード・ダブルディック中尉の身体がブリュッセルに運ばれました。彼はその地の病院に寝かされ、長く明るい夏の間、来る週も来る週もベッドに横たわっていましたが、やがて戦争によって放置されていた作物が実り、取り入れの時期になりました。

幾日も幾日も陽が昇り、人や家が立て込む都市に沈んで行き、幾晩も幾晩も明るい月がワートルロー¹²の平野を静かに照らしていましたが、かつてリチャード・ダブルディック中尉として名を馳せた人物にとって、そうした時の流れは停止したままでした。イギリス軍は意気揚々とブリュッセルに進軍したかと思うと、また退却を余儀なくされました。兄弟、父親、姉妹、母親、そして妻たちがその地に殺到し、それぞれの運命により歓喜と苦悩の涙を流しながらその地を去って行きました。幾度となく吊いの鐘が鳴り、幾度も大きな建物の影が変化し、数知れない光が突如として黄昏の空に現れ、数知れぬ足があちこちの舗道を行き交い、幾時間も幾時間も夜の涼しい空気の中で眠りが訪れましたが、こうしたことをまったく感じないまま、無表情な顔がベッドに横たわっていました。その顔はリチャード・ダブルディック中尉の墓石に

刻まれた横臥像の顔を偲ばせるものでした。

ついに、時と場所が混沌とした長々とした重苦しい夢にうなされ、彼が知っている軍医たちや、若い頃に知っていた人たちの顔——その中には気遣わしげな表情を浮かべた、誰よりも愛しく優しいメアリ・マーシャルの顔があり、それはどの顔よりも現実味を帯びていました——が、ちらっと浮かんだり消えたりする中で、リチャード・ダブルディック中尉は意識を取り戻しました。夢から覚めた彼の目に映ったのは、秋の静かな夕暮れの美しい情景や大きな窓が開けられたままのすがすがしく静かな部屋の佇まいで、外のバルコニーには風にそよぐ葉と芳しい香りを漂わせる花が見えました。さらにその先には、澄み切った空に夕陽がぽっかりと浮かび、その黄金色の光が彼のベッドに明るく射し込んでいました。

全てが静寂に包まれ実に快く、彼は別の世界にいるような気がして、かすかに声を出して言いました、「トーントン、近くにいるのですか？」

顔が彼の上に屈みこんでいました。彼の顔ではなく、母親の顔でした。

「看病に来ましたのよ。何週間も病院で看病した後、ずっと前からこちらに移ったのです。何か覚えていますか？」

「何も覚えていません」

夫人は彼の頬に接吻し、気持ちを和らげるように彼の手を取りました。

「連隊はどこにいるのですか？ 何が起こったのですか？ お母さんと呼ばせて下さい。何が起こったのですか、お母さん？」

「大勝利ですよ。戦争は終わり、あなたの連隊は戦場で最も勇敢に戦いました」

彼の目が輝き、唇が震え、すすり泣いて涙が頬を濡らしました。彼はすっかり衰弱していて、手を動かすこともできませんでした。

「今、暗くなりましたか？」と、ほどなく彼が口を開きました。

「いいえ」

「私が暗く感じただけでしょうか？ 何か、黒い影のように部屋から出て行きました。でも、それが去るとき、太陽が——ああ、聖なる太陽、何て美しいんでしょう！——私の顔に触れ、白い雲が軽やかに戸口から出て行くのを見たような気がしました。何も出て行きませんでしたか？」

彼女は頭^{かぶり}を振りました。彼はすぐに眠りに陥り、彼女は手を取ったまま、彼の気持ちを和らげようとしていました。

それを機に、彼は快復に向かいました。彼は徐々に——頭に銃弾を受けて瀕死の状態になり、身体にも銃弾を撃ち込まれていたからです——、毎日少しずつですが、病状が好転していきました。ベッドに横たわったまま会話ができるようになって間もなく、彼はトーントン夫人に誘われていつも自分の身の上話をしていることに気づきました。すると彼は彼の恩人の最期の言葉を思い出し、「それを話せば母親の慰めになる」と考えました。

ある日、彼はすがすがしい気分で目を覚まし、本を読んでもらえませんか、と夫人に頼みました。しかし、光を遮るために掛けられていたベッドのカーテン——彼が目覚めると、仕事を

しながら座っている枕元のテーブル越しに彼の姿が見えるように、夫人はいつもそのカーテンを開けていました——が引かれたままになっていて、夫人のものとは違う声が彼に話しかけたのでした。

「知らない人を見ても大丈夫ですか？」と、その声が優しく言いました。「知らない人を見たいですか？」

「知らない人！」と彼は鸚鵡返しに言いました。その声を聞いて、彼がリチャード・ダブルディック二等兵になる前の記憶が甦ってきました。

「今はそうですが、かつては親しかった人です」とその声と言いました。その口調を耳にして、彼の胸が高鳴りました。「リチャード、長い間別れ別れになってしまって、私の名は——」彼は「メアリ」と叫びました。彼女は彼を両腕で抱き、その頭を自分の胸に当てました。

「私は性急に結婚の誓いをしましたが、それを破る気はありません、リチャード。いま話しているのはメアリ・マーシャルではありません。私は別の名になったのです」

彼女は結婚していたのでした。

「別の名前になったのよ、リチャード。お聞きになってませんか？」

「初耳です！」

彼は憂いを帯びた美しい彼女の顔を覗き込み、涙を浮かべたその笑顔を訝しげに見つめました。

「もう一度考えてみて、リチャード。ほんとうに私の名前が変わったことを聞いていないの？」

「ほんとうです！」

「話そうとして頭を動かさないで、リチャード。このままじっとして私の話を聞いて下さい。私は寛大で高潔な人を愛していました。その人を心から愛していました。長い間ずっと愛していました。真心を込めて献身的に愛していました。見返りを求めることもなく愛していました。その人のいちばん優れた才能のことも知らずに愛していました——その人が生きていることも知らないで。その人は勇敢な兵士でした。その人は数知れない人たちから称賛され愛されていましたが、その人の大切な友人であった人の母親が私を見つけ出し、その人が数々の武勲に輝きながらも私のことを忘れたことはない、と話して下さいました。その人は大戦で負傷し、瀕死の状態でのブリュッセルに搬送されて来ました。私はその人を看病するためにブリュッセルに向かいましたが、そのためなら、どんなに荒涼とした地の果てにでも喜んで行ったことでしょう。その人は他の人のことはよく分からなくても、私のことは分かってくれました。いちばん苦しかった時も、その人はその苦しさをほとんど零すことなく、今こうしているように、私の胸に喜んで頭を休めていました。その人が息を引き取りかけたとき、私たちは結婚しました。その人が、死ぬ前に私を『妻』と呼びたかったからです。ですから、あなたが記憶を失っていたあの夜についての私の名は——」

「今、はっきりしました！」と彼はすすり泣きながら言いました。「おぼろな記憶がはっきりしてきました。記憶が甦りました。神に感謝します、意識がすっかり戻ったことを！私のメアリ、キスして下さい。頭からこのもやもやした思いを鎮めて下さい、でないと嬉しく

て死にそうです。彼の最期の言葉が成就しました。『家庭』にもう一度めぐり逢えたのです！」

そうです！ 彼らは幸せでした。快復には長い時間がかかりましたが、その間もずっと二人は幸せに過ごしました。地面に積もっていた雪はすでに溶け、初春になってまだ葉をつけていない雑木林で小鳥たちが囀るようになると、三人は初めて馬車で外出できるようになり、無蓋の馬車の周りに人々が群がってリチャード・ダブルディック大尉に歓声を上げ、その快復を喜んでいました。

しかし、そこまで快復しても大尉はイギリスに戻れず、完治するまで温暖な南フランスで療養しなければなりません。彼らは古いアヴィニョンの町から馬で行くことができ、壊れた橋が見えるローヌ川のほとりに住いを見つけました。それは彼らの望み通りの場所で、彼らは六ヶ月そこで共に過ごし、イギリスに戻りました。三年が経過してトーントン夫人は老いが隠せなくなり——と言っても、彼女の明るい黒い瞳が霞むということはありませんでした——転地によって元気になったことを思い出し、一年間、もう一度転地した場所に行くことにしました。彼女は、自分の息子をよく抱っこしてくれた忠実な召使いと共に出国し、年末になればリチャード・ダブルディック大尉がその地に行って彼女をイギリスに連れて帰ることにしました。

彼女は彼女の息子と娘（すでにそう呼ぶようになっていました）に几帳面に手紙を書き、彼らも同じように便りをしていました。彼女はエクス近郊に居を移し、地主の館に間借りすることになり、フランスのどの地方に住む家族と親しくなりました。彼女はぶどう園でしばしば美しい少女と逢っていて、それで彼女の家族との親密さも深まっていきました。その少女はとっても優しい子で、孤独なイギリスの夫人が語る不幸な息子の話や残酷な戦争の話を、飽きることなく聞いていました。家族もその少女と同じように優しい人たちで、やがて夫人と家族は懇意になって、その家族の招待を受け入れ、外国に滞在する最後の一ヶ月、夫人はその館で過ごすことにしました。こうしたことが起こる度に、彼女はその出来事を逐一便りに書いて、国の夫婦に知らせていました。やがて、館の主人による丁重な手紙が同封され、その手紙には「近々こちらにお迎えに来られる名聲赫々たるリチャード・ダブルディック中尉殿と交誼を結べる栄を鶴首しております」といった言葉が書かれていました。

今やダブルディック大尉は以前よりも肩や胸の幅が広くなり、活力に溢れ、容貌も堂々たるものになっていました。彼はすぐに丁重な礼状を送り、自らも急いでその後を追いました。平和が訪れて三年経った広々とした田園地方を通り抜けながら、彼は戦禍のない世の中になったことを神に感謝しました。小麦が不自然な赤みを帯びることなく、黄金色に実り、かつてのように生死をかけた戦いで兵士によって踏み躪られることもなく、食しよくに供するために束ねられていました。煙が、燃える廃墟からではなく、平和な家の炉辺から立ち昇っていました。荷車が負傷兵や戦死者ではなく、大地に実る新鮮な果物を運んでいました。それとは逆の恐ろしい光景を見てきた彼には、こうした景色がほんとうに美しく思われるのでした。それに心を和ませながら、空が青く澄み切ったある夕刻、彼はエクス近郊の古風な邸宅に辿り着きました。

それは、円い塔、横垣の松明消し、高い鉛葺きの屋根、そしてアラジンの宮殿も顔負けしそ

うな沢山の窓のついた、いかにも幽霊がでそうな古色蒼然とした大邸宅でした。昼間の暑さが残っていたため、格子窓の日除けがみな開け放たれていて、内部の漫然と延びる壁や廊下をかすかに見ることができました。さらに、半ば朽ちたばかりでかい離れ家、鬱蒼と茂る木々、段庭、欄干、水が乏しく汚れているためとても利用できそうにない水槽、銅像、生い茂る雑草、そしててんでばらばらに枝を伸ばし灌木さながらに蔓延っている雑然とした鉄柵などが目に入りました。玄関の扉は、昼間の暑気が治まった時にこの地方でよく見られるように、開け放たれたままになっており、呼び鈴もノッカーもなかったので、大尉はそのまま中に入って行きました。

彼は、天井が非常に高い、石造りの広間に入って行きました。そこは、昼間、ぎらぎらと照りつける陽射しを浴びながら南部を旅して来た後では、爽快な涼しさを感じさせると同時に、暗くて陰気な感じでした。この広間の大きく広がる四面の壁は回廊になっていて、そこから幾つもの部屋に通じていて、天井から照明がありましたが、そこにも呼び鈴は見つかりませんでした。

「いよいよだぞ」と、大尉は自分の長靴がカタカタ鳴る音に困惑しながら言いました、「幽霊のお出座だ！」

彼は思わず後退りし、顔が蒼白になるのを感じました。例のフランスの将校——その姿を長い間ずっと心に描いてきた将校——が回廊に立って彼を見下ろしていたのです。ついに、本人——紛いようのない目鼻立ち——を前にしたのです！

回廊から彼の姿が消え、その後急いで広間に下りて来る足音が聞こえました。彼はアーチの下を通って彼に近寄って来ました。その顔には、あの運命の瞬間とまったく同じような咄嗟の明るい表情が浮かんでいました。

リチャード・ダブルディック大尉殿ですね？ お越しいただいてとても嬉しく思います！失礼をご容赦下さい！ 召使いたちが庭でちょっとした祝宴を張るため、みな出払っているものですから。実は、私の娘の聖名祝日です。娘はトーントン夫人の世話になり、可愛がってもらっています。

彼がとても愛想よく率直でしたので、リチャード・ダブルディック大尉は、握手を求められて、それに応じざるを得ませんでした。「これが勇敢なイギリス人の手ですか」と、手を取ったままフランスの将校が言いました。「敵であっても勇敢なイギリス人を尊敬しますが、友であれば尚更です！ 私も軍人でしたから」

「私はこの将校をよく覚えているが、彼は私のことは覚えていないようだ。あの日、私は彼の顔を心に焼きつけたのに、彼の方は私の顔をよく見ていなかったようだ」とリチャード・ダブルディック大尉は心の中で呟きました。「はて、いかに話を切り出すべきか？」

フランスの将校は客を庭園に案内し、彼を妻に紹介しました。彼女は美しく魅力的な女性で、トーントン夫人と一緒に風変わりな古風な四阿あづまに座っていました。初々しく美しい顔をした彼の娘が、嬉しさを顔いっぱい浮かべて走り寄って彼に抱きつき、さらに幼い坊やが父親の脚に駆け寄ろうとして、広い石段に置かれたオレンジの木の上に転がってしまいました。招待された大勢の子供たちが陽気な音楽に合わせて踊っていて、館の周辺に住む召使いや農民たちも

また踊っていました。それは、大尉の旅に慰めを与えてくれた平和な情景の仕上げに用意されたと思われるほど、素朴な幸せを感じさせるものでした。

大尉はどうすべきか思い悩みながら、その情景を見ていましたが、やがてベルが鳴り響き、フランスの将校が部屋にご案内しましょうと申し出ました。彼らは将校が最初に立って見下ろしていた回廊に上がって行き、リチャード・ダブルディック大尉は館の外部にある立派な部屋に丁寧に案内されました。その部屋にはさらに小部屋があって、そこには幾つかの時計が掛かっており、飾り布が掛けられ、真鍮製の犬の置物があり、化粧タイルが張られて、冷房の工夫もされていて、優雅で広々としていました。

「あなたはワーテルローの戦いに参戦されていたね」とフランスの将校が言いました。

「ええ」とリチャード・ダブルディック大尉が答えました。「バダホスでした」

一人になって自分自身の声しか聞こえない状態に置かれ、彼は腰を下ろして考えました、どうすればいいのか、いかに話を切り出したものか？ その時期、不幸なことに、イギリス人とフランス人の将校の間で幾度となく悲惨な決闘が行われていて、リチャード・ダブルディック大尉の心を占めていたのは、こうした決闘のことや現実の将校のもてなしをいかにして避けるか、ということでした。

彼は考え続け、夕食の着替えに間に合わなくなりましたが、トーントン夫人が扉の外から話しかけ、メアリからの手紙を見せてもらえませんか、と彼に求めました。「恩人の母親のこと、それが何より大切だ」と彼は考えました、「彼女にどう言えばいいのか？」

「こちらのご主人と仲良くして下さいね」と、彼が急いで部屋に入れたトーントン夫人が言いました、「一生続くほど。とても誠実で寛大な方ですから、リチャード、きっと信頼し合えますわ。もしあの子が生きていたら」と彼女は息子の髪を入れているロケットに接吻しながら（涙を零して）言いました、「あの子は寛大な心であの方のことを認め、あのような方を敵にしまった惨い戦争が終わったことを心から喜んだことでしょう」

夫人が部屋を出ると、大尉は庭園で踊る子供たちを見ることが出来る窓に歩み寄り、さらに別の窓から外を覗くと、心を和ませる情景と穏やかに広がるぶどう園が見えました。

「天上にいます霊よ」と彼は言いました、「こうした優しい思いが私の心に湧き上がってくるのは、あなたの導きなののでしょうか？ 長い旅路の果てに将校に逢わせ、こうして平和が訪れた時代の恵みを私に見せてくれたのは、あなたなののでしょうか？ 私の怒りの手を押し留めるために、あなたの老いた母親を私のところに寄越されたのは、あなたなののでしょうか？ 将校はあなたと同じように自らの務めを果たした——あなたの導きで奈落の底から救われた私が、自分の務めを果たしたように——それだけのことだ、という囁き声が聞こえます。それはあなたの声なののでしょうか？」

彼は両手に顔を埋めて座っていましたが、立ち上がると人生で二度目の強い決意——フランスの将校にもこの世を去った恩人の母親にも、あるいは誰であれ、二人のうち一人が生きている限り、自分だけしか知らない秘密を口外することはすまいという決意——を固めました。そしてその日の夕食で、乾杯のために互いのグラスを触れ合わせたとき、罪を赦す神の御名によ

って、彼は秘かに彼を許していたのでした。

これで、貧しい旅人についての私の話は終わりです。しかし、現在の時点でこの話ができたとすれば、それ以後の話も付け加えることができたでしょう。つまり、リチャード・ダブルディック少佐の息子、それにフランスの将校の息子が以前に父親たちがそうであったように友情で結ばれ、平時が訪れて離れ離れになっていた兄弟が再会してしっかりとその絆を確かめ合うように、彼らは心を一つにしてそれぞれの国民と共に共通の理想のために戦ったのでした。

第三章

道

私の話も酒宴も終わり、大聖堂の鐘が十二時を打つと、私たちは解散しました。私はその晩には旅行者たちに別れの挨拶はしませんでした。翌朝の七時に熱いコーヒーと共に彼らにもう一度逢えると思ったからです。

大通りを歩いていると、遠くから聖歌隊が歌う賛美歌が聞こえてきたので、私は大通りから外れて、歌が聞こえる方角に歩を向けました。彼らはこの町の古い城門付近で賛美歌を歌っていました。その門は驚くほど風変わりな赤煉瓦造りの家並みが続いている通りの隅にあり、クラリネットを吹いている人物が、あの家々には聖職禄をうけない聖職者たちが住んでいると親切に教えてくれました。それぞれの家の上部は、古い説教壇の上にある反響板のような、小さくて妙なポーチ造りになっていましたので、私は聖職者の一人が階段の上に現れ、聖句として寡婦の家を食い倒す律法学者についての箇所¹³を引き合いに出して、ロチェスターの貧しい学生に関してちょっとしたクリスマスの説教をしてくれないものかと思いました。

例のクラリネット奏者が実に話し好きである上に、私の性分も行き当たりばったりなところがあって(たいていの場合そうなのですが)、私は聖歌隊の後についてヴァイン(葡萄)と呼ばれる野原を越え、ワルツを二度そしてポルカを二度踊り、さらにアイルランドの歌を三曲歌う余興に加わり(フランス語的な意味ですが¹⁴)、すんでのことに自分の宿のことを忘れるところでした。しかし、その後宿に引き返すと、台所にヴァイオリンが置かれていて、白目の若者ベンと部屋係の二人のメイドが、大きな^{もみ}縦材のテーブルの周りを楽しそうに^は跳ね回っていました。

その夜はなかなか眠れませんでした。七面鳥やビーフのせいであったとは言えません——酒宴のせいだとはとても考えられません——が、何とか眠ろうと努力する度に惨めな結果に終わるのでした。私は一睡もできませんでした。心がどんなにとりとめのない方向に流れても、そこにリチャード・ウォッツ師の像がきまって割り込んで来たからです。

手短かに言うと、私は立派なりチャード・ウォッツ師を何とか避けようと、まだ暗い六時にべ

ッドから出て、習慣になっているのですが、僅かしか使えない冷たい水に身を浸しました。通りに出ると、外気はとてどんよりとして冷たく、私たちが前夜酒宴を開いたウォッツの慈善宿の食堂に置かれた一本のろうそくが青白く燃えていて、それも私と同じように眠れない夜を過ごしたようでした。しかし、旅人たちはぐっすりとした眠りから覚めて、熱いコーヒーを飲み、ベンが懸命に気配りして木材置場の樅材のように積み上げたバターつきのパンをせっせと平らげていました。

まだ日が明けやらぬうちに、私たちは皆通りに出て握手を交わしました。未亡人は船に乗る少年をチャタムに連れて行ってやり、そこで彼はシアネスに向かう船を待つことにしました。いやに勿体振った法律家は、誰とも関わりたくない気持ちから自分の行く先を洩らさないで、わが道を歩んで行きました。さらに二人が大聖堂と古い城の所で別れてメイドストーンに向かいました。そして書籍行商人は橋を越える所まで私と同行しました。私はというと、ロンドンに行くにはいちばん遠回りなと思われるコバムの森まで歩いて行くつもりでした。

本道から逸れる予定にしていた小道の踏越し段に着いたとき、私は最後まで一緒だった貧しい旅人に別れを告げ、一人で旅を続けました。霧が得も言えないほどの美しさで立ち昇り、太陽が輝き始め、至る所で霜がきらきらと光るのを見ながら身が引き締まるような冷氣の中を歩いていると、私は森羅万象が偉大な生誕の喜びを共にしているような気がしました。

森を通り抜け、苔生した地面や茶色に積もった落葉の間を静かに歩いていると、辺りに漂うクリスマスの神聖さがいっそう強く感じられるのでした。霜が白く凍りついた木々の幹に取り囲まれていると、時の創始者は常に祝福と癒しの慈悲深い手を差し伸べてくれるのに、無意識に佇む木にそれが及ばないのは何故だろう、と思ったりもしました。コバム・ホール¹⁵を通過して、クリスマスの時節が呼び覚ます「揺るぐことのない希望」に包まれて死者が眠っている村の墓地にやってきました。とても多くの子供たちが戯れている¹⁶のを見て、子供を愛されたあの方¹⁷のことを思い出し、彼らをどんなに愛しく思ったことでしょう。私が通り過ぎて来た庭園はどこもこの日の趣と調和してしていました。庭には墓石があって、「あの方を庭師と思った女」がこう言ったことを思い出したからです、「もしあなたが、あの方を移したのでしたら、どこへ置いたのか、どうぞ、おっしゃって下さい。私があの方を引き取ります」¹⁸やがて舟が浮かんでいる遠くの川、それと同時に魚網を繕っている貧しい漁師たちの姿がはっきりと見えてきて、彼らは立ち上がってあの方について行きました。さらに、あまりの群集のために岸から少し沖に出された舟からあの方が教えを説く光景¹⁹——寂しい夜、水面を歩かれる威厳のあるお姿²⁰が見えました。地面に映る私自身の影が、クリスマスであることを強く感じさせました。あの方の話を聞いたりその姿を見たりした人たちが、あの方が通り過ぎる時にできた影に、病人を寝かせなかったでしょうか²¹？

こうして遠く近くクリスマスの雰囲気に取り巻かれながら、私はブラックヒースに辿り着き、グリニッジ公園の節くれだつた櫨の老木が遠くまで続く並木道を歩き、ふたたび立ち込めてきた霧の間を汽車でがたと揺られながら光溢れるロンドンへと向かいました。ロンドンは明るく輝いていましたが、私の家の暖炉の方がもっと輝いていて、クリスマスを祝うために集まっ

た人たちの顔はいつそう輝いていました。その場で、私はリチャード・ウォッツ師のこと、そして六人の貧しい旅人と共に過ごした宴の話をしましたが、彼らは放浪者でも自分を騙る者でもなく、それ以来今日まで、私は彼らの誰とも逢っていません。

注

- 1 ダビデに殺されたペリシテ人の巨人。(「サミュエル記上」、第十七章四十九～五十一節参照)
- 2 古くから北ヨーロッパに流布していた童話の主人公。内容はまちまちであるが英語本によれば、トムはアーサー王時代の農夫の子で、牛に吞まれ、カラスにさらわれ、巨人に呑み込まれる。ディケンズはこの童話を気に入っていて、他の作品にも言及が見られる。
- 3 イングランドの王(一一九九～一二一六)。フランスと戦って敗れ、フランス内の領土の多くを失った。一二一五年マグナ・カルタ(大憲章)に署名させられ、「欠地王」と呼ばれた。
- 4 マザーグース童謡で詠われている有名な人物。ジャック・ホーナーはグラストンベリー大聖堂の修道院長の幹事であったが、修道院長はクリスマスの贈物をホーナーに持たせて王に届けさせようとしたが、贈物のクリスマス・パイの中からプラム(つまり荘園の権利書)を抜き取って自分の物にしたと言われている。ホーナーが「暖炉の隅に座って、クリスマス・パイを食べる」という歌詞がある。
- 5 「ルカ伝」、第二章十四節参照。
- 6 イギリスで募兵係の将校が応募者に与えたシリング貨。これを受けると兵役の義務が生じた。一八七九年に廃止される。
- 7 ウェリントン将軍がイギリス軍を率いてスペイン・ポルトガル軍と連合し、ナポレオンのフランス軍をイベリア半島から駆逐した(一八〇八～一四)。
- 8 スペイン南西部の都市。
- 9 「ルカ伝」、第七章十四節。
- 10 ベルギー南西部、ブリュッセル付近の村。ワーテルローの前哨戦跡地。
- 11 ブリュッセルから二十五マイル南南東のところにある、ナミュール州の村落。
- 12 ベルギー中部、ブリュッセル南方の村。一八一五年六月十八日、ナポレオン一世がイギリスのウェリントン指揮下の連合軍に大敗戦を喫した地。
- 13 「マルコ伝」、第十二章四十節。
- 14 原語は 'assist' であるがフランス語の 'assister' には「参加する」、「立ち会う」といった意味がある。
- 15 ゴバムの森とゴバム公園はギャズヒル・ブレイスの南にあり、公園の中心にダーンリー伯爵の邸宅であったコバム・ホールがある。この辺りはディケンズが好んだ散策の場所であった。
- 16 「ゼカリア書」、第八章五節。
- 17 「マタイ伝」、第十九章十四節他参照。
- 18 「ヨハネ伝」、第二十章十五節。
- 19 「ルカ伝」、第五章一十節他参照。
- 20 「マルコ伝」、第六章四十八～九節他参照。

21 「使徒行伝」、第五章十二～十六節参照。

編 集 委 員

藤本隆康・Stephen H. Brown

平成21年3月31日 発行

発 行 所 甲南女子大学英文学会
神戸市東灘区森北町6丁目2-23
甲南女子大学英語英米文学科コモンルーム
TEL (078) 413-3124

編集代表 梅 原 大 輔
